

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和50年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001203

昭和50年度

国立国語研究所年報

—27—

国立国語研究所

1976

刊行のことば

本書は、昭和50年度における研究の概要及び事業の経過について述べたものである。

50年度に刊行したものは次のとおりである。

現代新聞の漢字（報告56）

国立国語研究所年報—26—（昭和49年度）

国語年鑑（昭和50年版）

日本語と日本語教育・文字表現編（日本語教育教材『国語シリーズ』別冊4）

昭和51年6月

国立国語研究所長

林

大

目 次

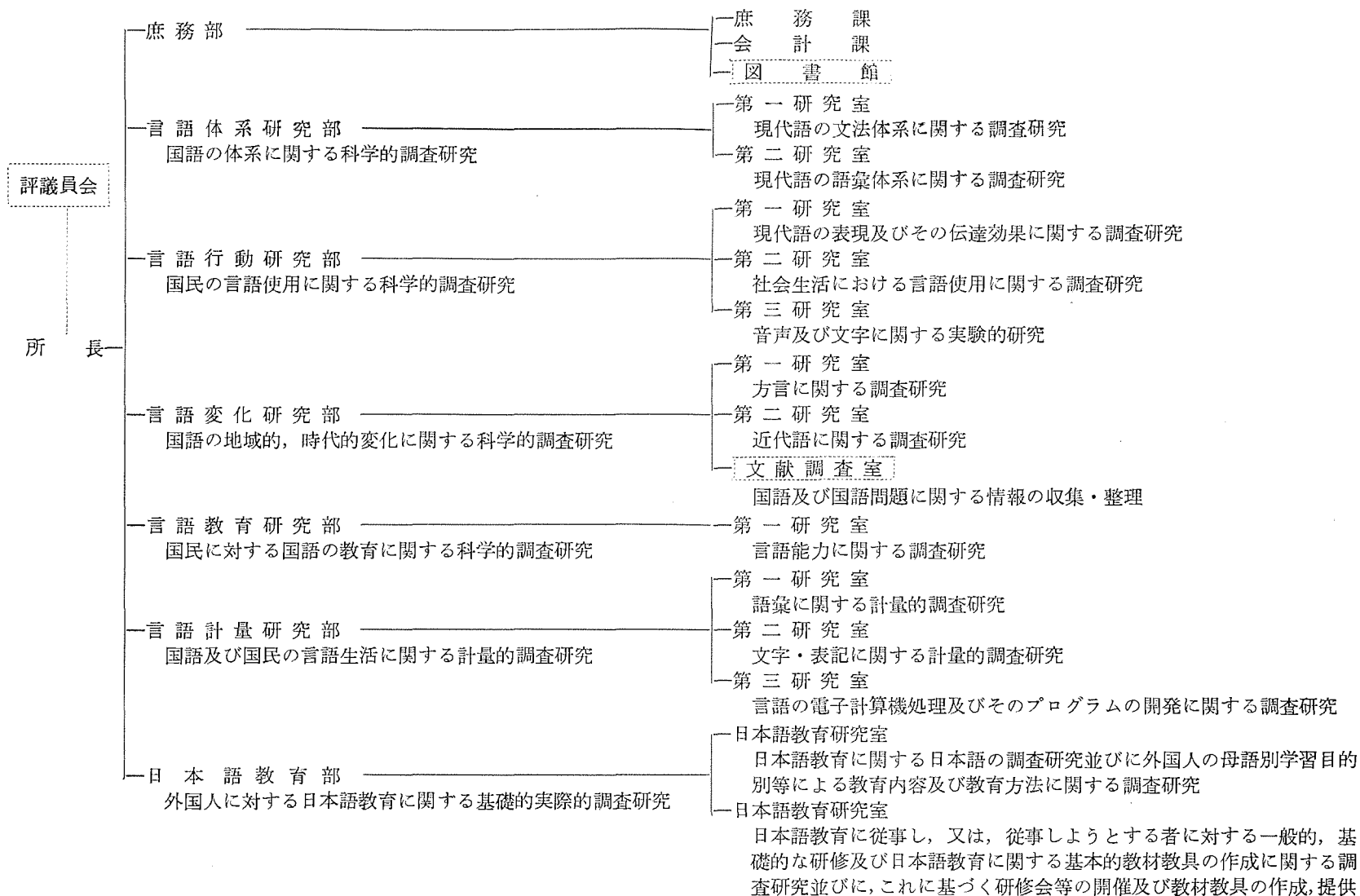
刊行のことば

昭和50年度の調査研究のあらまし	1
現代語文法の記述的研究	8
現代語彙の概観的調査	11
敬語の社会的研究	13
所属集団の差異による言語行動の比較研究	16
現代語の表現の文体論的研究	17
各地方言親族語彙の言語社会学的研究	19
発音過程に関する研究	21
図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究	22
日本語地図の検証調査	23
「各地方言資料の収集および文字化」のための研究	25
明治初期における漢語の研究	28
幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究	35
電子計算機による言語処理に関する基礎的研究	40
漱石・鷗外の用語の研究	44
新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究	47
新聞語彙調査の短単位語処理	49
高校教科書の用語調査	51
日本語教育のための基本的な語彙に関する調査研究	54
日本語教育に関する既存の研究成果の調査研究	56
日本語教育の現状（内容と方法）についての実態の調査	57
日本語教育教材および教授資料の作成	59
日本語教育研修の調査および実施	62
国語および国語問題に関する情報の収集・整理	67

図書の収集と整理	76
庶務報告	77

昭和50年度の調査研究のあらまし

研究所の機構は昭和49年度以降次のようになっている。



本年度の研究項目および分担は次のとおりである。

言語体系研究部

- (1) 現代語文法の記述的研究 第一研究室

現代日本語文法の体系的な記述を目的とする。本年度は、今までの文学作品や論説文の資料カードに加えて、シナリオ資料カードを作成し、これらの資料カードから動詞および副詞の用例カードを作成し、分類にとりかかった。

- (2) 現代語彙の概観的調査 第二研究室

近代になってどのような語がふえたか、という調査に着手した。また、事務用語のゆれを調査し、雑誌における漢語表記のゆれについて報告をまとめた。

言語行動研究部

- (3) 敬語の社会的研究 第一研究室

契約社会、利益社会とよばれる社会の中で、敬語がどのように使われ、意識されているかの実態を把握することを目標にした、3年計画の調査研究の初年次である。東京に本社をもつ2企業（a・株式会社日立製作所、b・日鐵建材株式会社）を対象に、アンケート調査（a、b両社）、面接調査（a社のみ）、事務室内実況録音調査（a社のみ）を実施し、調査結果の集計作業、録音の文字化作業を進めた。

- (4) 所属集団の差異による言語行動の比較研究 第一研究室

昭和47年度に岡崎市で行った調査の整理集計を行うとともに、昭和49年度に東京・大阪で行った調査資料を整理した。

- (5) 現代語の表現の文体論的研究 第一研究室

新しいレトリック理論を構築するため、関連分野の既知情報を収集するとともに、現代文学作品から探り出した各種の表現手段を加えて、文体効果と言語的性格との対応という観点で整理し、その文章表現技法を体系化する。本年度はそのための研究準備を進める一方、その一環である比喩研究の報告書原稿の執筆を完了した。

(6) 各地方言親族語彙の言語社会学的研究 第二研究室

前年度までに、全国各地の方言集・方言辞典・民俗誌・村落調査報告書その他の文献から採集した方言の親族語彙カード約二万一千枚と、当研究所所蔵のいわゆる「東条カード」の中の方言の親族語彙カード約一万枚とを合わせて、分類整理の作業にあたった。その結果、意味項目ごとの都道府県別台帳が出来上がった。また、青森県北津軽郡板柳町と高知県宿毛市で臨地調査をした。

(7) 発音過程に関する研究 第三研究室

前年度に引き続き、日本語の種々の音声を発音する時の音声器官の運動のX線映画フィルムによる分析を進めた。

(8) 図形・文字の視覚情報処理過程および読書過程に関する研究

第三研究室

ミニ・コンピュータによる文章提示装置、角膜上の光源像の動きから眼球運動を測定する装置を整え、これを用いて、読みの過程に関する実験を実施した。

言語変化研究部

(9) 日本言語地図の検証調査 第一研究室

言語地図に盛られている言語資料の性格を明らかにするための調査である。これまでいろいろな調査を行ってきたが、本年度にいちおう完結し、分析・整理にはいる予定である。

(10) 「各地方言資料の収集および文字化」のための研究 第一研究室

失われつつある方言を、現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料としようとする。本年度は、3か年計画の第2年次として、全国23か所で録音・文字化を行った。

(11) 明治初期における漢語の研究 第二研究室

明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を明らかにするため、翻訳小説『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）とについて語彙表を作成し、両作品に現れた漢語の分析を進めた。また、近代語研

究資料の調査を行った。

言語教育研究部

- (13) 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査研究 第一研究室
幼児・児童における母国語の習得過程、および言語の習得と幼児・児童の人間の諸能力の発達との関係を明らかにするため、前年度に続き、〈左右、前後、ななめ〉などの空間関係語をとりあげ、それらの語の意味理解と認知発達に関する実験を行った。また、幼児の言語および学習行動に関する録音および観察と文献資料の整理展望を継続した。

言語計量研究部

- (13) 電子計算機による言語処理に関する基礎的研究 第一、二、三研究室
用語調査ならびに用語検索システムを作成し、新聞語彙調査データ・高校教科書調査データなど、各種の入力データについて機械処理をすすめ、さまざまな検索結果を得て、言語情報処理の基礎的な研究を行うことを目指している。また、語彙・表記および語句の連接形態などの計量的分析を進めている。

- (14) 漱石・鷗外の用語の研究 第一、三研究室
電子計算機によって、漱石、鷗外の作品の索引を作成するとともに、その用語の分析を行うもので、本年度は、高速漢字プリンタを使うシステムによって、『山椒大夫』『坊っちゃん』『草枕』の索引ファイル（磁気テープ）を作成し、修正作業を進めた。また、『渋江抽斎』『こころ』についても、索引作成のための準備的作業を進めた。

- (15) 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究 第二研究室
新聞語彙調査に併行して、語の表記の調査を実施し、漢字の使用度数集計とともに、漢字表記語、仮名表記語、ませ書き語等について分析した。漢字の使用度数集計と漢字表記語の分析結果を『現代新聞の漢字』（報告56）として刊行した。

- (16) 新聞用語調査の短単位語処理 第一、二、三研究室
新聞用語調査は長単位語による処理を終わっているが（昭和47年度）、そ

のあとをうけて短単位語による処理を行い、新聞用語全体を明らかにしようとする。本年度は短単位処理のための入力紙テープの機械によるチェックを行い、全データについて長単位ファイルを作成し、機械による短単位細分と漢字ふりがな情報記入とを行った。

(17) 高校教科書の用語調査 第一、二、三研究室

国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として調査を行う。本年度は、2年度目で、処理プログラムを作成し、データの前処理を進め、一部データについて校正用小KWICを作成した。

日本語教育研究部

(18) 日本語教育のための基本的語彙に関する調査研究 日本語教育研究室

本調査は外国人学習者がはじめに学習すべき一般的、基本的な日本語の語彙習得の目安を立てることを目的とするもので、日本語教育ならびに国語学、言語学の専門家20人に委嘱し、『分類語彙表』（資料集6）に収録された約4万語の一語一語について基本度の判定を行い、その結果を集計することによって基本語彙表を作成しようとする。本年度は4万語のうちその約半分の2万語について判定作業を終了した。

(19) 日本語教育に関する既存の研究成果の調査研究 日本語教育研究室

学習者の母語別による日本語教育の内容・方法上の問題点を明確にし、そこから日本語教育研究上の方法論と具体策を探求しようとするもので、本年度は比較対照研究の方法論の確立、さらに個別的に日本語と外国語との対照研究をおし進めるために、既存の各種研究成果を収集し調査研究の準備を進めている。

(20) 日本語教育の現状（内容と方法）についての実態調査

日本語教育研究室

教育目的別による日本語教育の内容・方法上の問題点を明確にし、そこから日本語教育研究上の方法論と具体策を探求しようとするもので、本年度は年少者教育を対象とし、それぞれの機関の日本語教育実務に携わって

いる担当者の代表を集めた2回の研究連絡協議会を設け、各機関の日本語教育の現状ならびに問題点を聴取した。

(21) 日本語教育教材および教授資料の作成 日本語教育研修室

(1)日本語教育のための教授参考資料として『日本語と日本語教育——文字・表現編』を刊行した。これは日本語教育の指導上の参考に資することを目的としたもので、実際の日本語教育に造詣の深い日本語教育専門家等、所内外、12人の執筆者が執筆した論文よりなるものである。(2)日本語教育のためのモデル教材として5分もの4巻の教育映画を制作した。これは日本語教育の現場において実際に役立ちうる視聴覚補助教材として制作したもので、制作にあたっては所外に委嘱した8名の委員からなる日本語教育映画等企画協議会の協力を得た。

(22) 日本語教育研修の調査および実施 日本語教育研修室

日本語教員の資質向上をめざして、効果的な研修を実施するためには、次のような項目について綿密な分析・検討をすることが必要である。すなわち、教授に必要な内容、カリキュラムの作成、教授資料、教材等の整備充実、又受講者の能力別、専門別、あるいは、長期・短期などのコース別の分析検討などである。以上の観点から、現在日本語教育機関その他において実施されている日本語教育講座・研修会等についてその資料の収集および調査を実施中である。また、今年度は東京・大阪の2会場において、それぞれ現職者研修・初心者研修の2講座を夏期集中講座として開催した。

(23) 国語および国語問題に関する情報の収集・整理 文献調査室

例年のとおり新聞・雑誌・単行本について調査し、情報の収集整理を行った。

なお、本年度は、科学研究費による研究は行われなかった。

現代語文法の記述的研究

A 目的と内容

現代日本語文法の体系的な記述を目的とし、実際に使用された言語作品を資料として、それをカード化して分析するものである。本年度は、つぎの三つのしごとをおこなった。

- a) シナリオ資料のカード化
- b) 動詞の使用例の採集
- c) 副詞の使用例の採集
- d) 文法用語の資料収集

B 担当者

言語体系研究部第一研究室

室長 高橋太郎 a, b, d 研究員 工藤浩 a, c 研究補助員
鈴木美都代 a, d

a については、カードを共同使用するため、作品の選択の段階で、言語行動研究部第一研究室の中村明が参加した。

C 本年度の作業

(1) この研究には、資料として、旧書きことば研究室で文学作品から採集して作成したカード、旧話しことば研究室と旧言語効果研究室で採集した科学説明文・論説文などのカードの余りを大量に使用することができるが（これらの用例カードの作品名、作成方法などについては、『年報』16～18を参照）、話しことばでの使用例をみるという観点から、シナリオ資料をカード化した。これがaのしごとである。

シナリオは、シナリオ作家協会編『年鑑代表シナリオ集』（'71～'74）を

台本とし、なるたけ時代物や方言のおおいものをさけて、つぎの諸作品をえらんだ。

'71…やさしい日本人、水俣一患者さんとその世界、婉という女、女生きてます、八月の濡れた砂、遊び、男はつらいよ一寅次郎恋歌

'72…約束、忍ぶ川、女囚七〇一号一さそり、旅の重さ

'73…戒厳令、人間革命、時計は生きていた、狭山の黒い雨、津軽じょんがら節、日本沈没

'74…華麗なる一族、極私的エロス・恋歌1974、妹、わが道、砂の器、宵待草、田園に死す

以上の作品を図書カードサイズごとにコピーし、100枚ずつ印刷して、異なり3,239枚、のべ323,900枚の資料カードを作成した。

(2) bでは、文学作品、科学説明文、論説文、シナリオの資料カードから動詞の使用例をぬきだし約20万枚の用例カードを作成した。

(3) cでは、文学作品、科学説明文、論説文、シナリオの資料カードから副詞、および動詞・形容詞の副詞形の使用例をぬきだし、約3万枚の用例カードを作成した。それと並行して、副詞および修飾法に関する研究文献を収集し、副詞研究の問題点を整理しつつある。

(4) dでは、種々の文献から、「継続動詞」「意志動詞」など「○○動詞」という形で記述されているものについて、その部分をコピーして、あつめた。

D 今後の予定

aで作成したカードの一部は、すでに動詞や副詞の用例カードとして使用しているが、今後さらに必要に応じて使用する。

bで採集した動詞のカードは、まず、詳細なパラダイムの作成のために分類し、さらに、それぞれの語形やカテゴリーの分析記述のために使用する。

cで採集した副詞および副詞相当語句のカードを、まず単語別に、つづいて用法別に分類する。さしあたり、陳述副詞・注釈副詞から用法記述を進めていく予定である。

dのしごとは、必要に応じて分野をひろげ、今後の分析・記述のための参考資料となるものを収集する。

現代語彙の概観的調査

A 目的と内容

現代日本語の語彙体系を、いろいろな観点から調査記述することを目的とする。本年度は、つぎの三つのしごとをおこなった。

- a) 現代語彙成立過程の調査
- b) 専門語の調査
- c) 雑誌九十種の語表記の調査

a, c は前年度からのつづき、b は本年度にはじめたものである。

B 担当者

言語体系研究部第二研究室

室長 宮島達夫 a, b, c 研究員 高木 翠 c

C 本年度の作業

- (1) a では、阪本一郎『教育基本語彙』の22500語のうち、『日本国語大辞典』に明治以前の用例がのっていないもの、したがって明治以後の新語である可能性のあるものをぬきだす作業をした。年度末までに約三分の一が終了。
- (2) b では、「複写～コピー」のような事務関係用語の各個人間のゆれをしらべた。調査対象は、「敬語の社会的研究」で調査の対象となった、日立製作所348名、日鉄建材195名（それぞれ事務部門）である。
- (3) c では、現代雑誌九十種の語彙調査資料について、漢語表記のゆれに関する調査をおえ、報告をまとめた。

D 今後の予定

aでは、本年度の作業をつづけ、bでは本年度の結果を分析するとともに工場で同様の調査を実施、cでは和語表記の調査にとりかかる。

敬語の社会的研究

A 目 的

敬語が、現代日本語社会でどのように意識され、使用されているかについての実態調査は、従来、その多くが対象を血縁的、地縁的社会——いわゆる地域社会に求めて行われてきた。これに対して本調査研究は、契約社会・利益社会（当面、具体的には一般私企業）を対象として、そこでの敬語の実態を把握しようとするものである。

その際の観点として、いわゆる社会言語学的な観点にたつ。具体的には、次の二点に特に注目する。

1. 敬語使用、敬語意識に関わる要因として、地域社会では、性、年齢、社会的階層、職業、学歴などが重要なものとされているが、契約・利益社会では、何がどのように関与しているか。
2. 契約・利益社会と、その成立基盤、背景としての地域社会との間の、言語上の関連はどのようなものか。後者は、どのように、どの程度、前者のいわゆる言語的後背地であるのか。

これらのうち、1は、これまで当研究所が行ったいくつかの地域社会での調査研究が依拠した観点をうけつぐものであり、2は、それらの調査研究から得られた知見を基礎として設定し得るものである。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

部長 野元菊雄 室長 中村 明 主任研究官 江川 清 (50.7.1から)
研究員 杉戸清樹 研究補助員 林 実知代 堀江よし子 (50.

4.25 言語変化研究部第二研究室から配置換え)

なお、事務室内実況録音調査実施には、言語行動研究部第三研究室の高田

正治が、また、企業内面接調査実施には、言語体系研究部第二研究室の宮島達夫、言語変化研究部第一研究室の佐藤亮一・真田信治、日本語教育部日本語教育研究室の水谷修・高田誠・志部昭平、同部日本語教育研修室の日向茂男が、それぞれ参加、協力した。

C 本年度の作業

3年計画の初年次にあたる本年度は、「A・目的」で示した観点の1から着手した。具体的には、東京都にある二つの企業の本社、

- a. 株式会社日立製作所・本店（千代田区）
- b. 日鐵建材株式会社・本社（中央区）

の、営業部門を除いた管理事務部門の社員を対象に、以下の3種類の調査を実施した。

1. アンケート調査（a, b両社）

a社；総数約900名中、400名に依頼。348名（87%）が回答。

b社；総数約300名中、196名が回答。

アンケート項目は17項目であり、内容的に、敬語意識、敬語使用、敬語付随行動、敬語習得、敬語知識に関するものに分類される。

2. 企業内面接調査（a社のみ）

アンケート調査への回答者から、直属・直轄の上司・部下の階層構成に留意しつつ抽出した109名に、個別に面接した。

質問は、企業内で日ごろ起こりそうな場面を指定し、「呼びかけ」、「返答」、「1, 2, 3人称の動作」、「依頼」などの表現形式について口頭で回答を求める形をとった。反応は、そのつど記録用紙に筆記するとともに、録音テープに収録した。

3. 事務室内実況録音調査（a社のみ）

構成員の全員がアンケート・面接両調査の対象となった課の一事務室を対象に、始業時から終業時までの全勤務時間内に室内で交される自然会話をすべて録音することを目標とした。あわせて、同室備付けの電話

による会話も録音した。ごく普段の勤務日の二日分を収録した。

以上の各々の調査実施後，調査結果の整理，集計，文字化作業に順次着手した。アンケート調査の中間的集計結果の一部は，面接調査の質問作成に利用された。

D 今後の予定

「A. 目的」の観点1については，次年度以降も一般企業を対象として，本年度とほぼ同規模・同内容の調査研究を継続していく。

観点2については，対象とする企業を選定する際に，その企業が成立する地域社会の敬語体系の特徴に注目し，イ，東京語の敬語体系の行われる地域（本年度実施），ロ，関西方言の敬語体系の行われる地域（大阪府を予定），ハ，敬語が稀薄とされる地域（茨城県を予定）の企業において調査研究を進める。イ，ロの地域社会における敬語の実態は，これまでの他の調査研究の知見を基礎に把握し得ようが，ハについては，地点によって，その地域社会そのものを調査対象とする必要が生じる。この種の調査研究もあわせて実施する。

各々の調査実施後，順次，調査結果の集計，録音資料の文字化およびそれらの分析作業に進む予定である。

所属集団の差異による言語行動の比較研究

A 目 的

人々の言語生活は性、年齢、生育地などの個人的条件を始めとし、彼らがおかれている社会的文化的諸状況と密接な関係をもっている。これらの諸条件と人々の言語生活との関連性を明らかにするために、種々の観点から社会言語学的な調査研究を行っている。

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

部長 野元菊雄 主任研究官 江川 清 研究補助員 林 実知代
堀江よし子

C 本年度の研究

本年度は主として下記の二つの調査の整理に取り組んだ。

- 1) 愛知県岡崎市での敬語使用および敬語意識の調査——昭和47年度に文部省科学研究費試験研究(1)（「社会変化と言語生活の変容」代表者 岩淵悦太郎）を受けて実施したものである。
- 2) 東京都および大阪市での言語生活の実態調査——昭和49年度に文部省科学研究費総合研究(A)（「大都市における言語生活の実態調査」代表者 野元菊雄）を受けて実施したものである。

D 今後の予定

51年度以降は、上記の二つの調査の分析を進めるとともに、若干の追加調査を行う予定である。

現代語の表現の文体論的研究

A 目的・方法

文体論の中心課題は、言語作品における文体効果とその言語的性格との対応をつきとめることである。その研究の基盤を築くため、この分野の既刊文献を収集して、その既知情報を整理する一方、現代文章に見られる各種の表現手段を探り出し、その言語的な手づきと表現効果とを軸に分類・体系化を行うことにより、新しいレトリック理論の構築を目指す。

また、その現代文章表現の文体論的研究の一環として、比喩表現の理論的考察および形態面の分類を行った研究報告書『比喩表現の理論と分類』で残された比喩表現の内容的分析を、上記の各種の表現技法を考察する過程であわせて進める予定である。

B 担当者

言語行動研究部第一研究室

室長 中村 明 研究補助員 林 実知代

C 本年度の経過

- 1) 比喩索引を作成し、報告書『比喩表現の理論と分類』の原稿執筆を終了した。
- 2) 報告書の資料部分の修正を行い、印刷原稿を完成した。
- 3) 比喩表現の内容面の分析方法を検討した。
- 4) 修辞学・文章表現・文体論の方面の既刊文献から関連情報を収集・整理する方法を検討するための基本的な準備を開始した。
- 5) 比喩表現の用例補充および各種表現手段の実例収集のため、シナリオ資料のカード化を言語体系研究部第一研究室と共同で行った。

D 今後の予定

- 1) 報告書『比喩表現の理論と分類』の校正を行い、公刊する。
- 2) 比喩表現の内容的分類を行うための補充用例を収集し、既存用例と合わせて内容面を中心とした分類作業に着手する。
- 3) 関連分野の既刊文献を収集し、必要情報を選択する作業に着手する。

各地方言親族語彙の言語社会学的研究

A 目的・意義

次の目的のもとに、わが国各地方言の親族語彙の収集と記述的研究を進める。

- (1) 日本語の親族語彙に関する全国方言辞典または資料集を編集して刊行する。
- (2) 日本語の方言の親族語彙は、語彙としてどのような構造をもっているか。親族組織上の特定の項目(・意味)を表す単語にどのようなものがあり、それらは全国的にどのような分布を示しているか。個々の親族語は、単語としてどのような意味や用法の構造をもっているか、などの言語的事実を明らかにする。さらに、これらの言語的事実が親族組織を含む日本の伝統的な社会構造や文化とどのようにかかわり合う側面があるのかを明らかにする。

B 担当者

言語行動研究部第二研究室

室長 渡辺友左 研究補助員 山口恵子 (50.12.31 退職)

C 本年度の経過

この研究は、旧第二資料研究室が昭和40年度からとりくんできた研究課題「社会構造と言語の関係についての基礎的研究」で渡辺が分担した課題の一部を発展させたものである。4年計画で、本年度はその第3年次にあたる。

本年度は、前年度にひきつづいて、次の二つの調査研究を並行して実施した。

- (1) 臨地調査——東北・関東・甲信・北陸・東海・近畿・中国・四国・九州・沖縄の10ブロックについて、4年間に、各1～2地点、全体で15地点程度

の臨地調査をすることを目標に、本年度は次の地点の調査をした。

青森県北津軽郡板柳町

高知県宿毛市

(2) 文献調査——全国各地の方言集・方言辞典・民俗誌・村落調査報告書その他の文献から方言の親族語とその意味用法に関する記述の部分をカードに逐一転写したものが、前年度までに約二万一千枚出来上がった。当研究所蔵のいわゆる「東条カード」の中の方語の親族語彙のカードと合わせると、約三万二千枚になる。本年度は、このカードを分類整理して、意味項目ごとの都道府県別台帳を作成した。さらに意味項目ごとの語形別類別の作業に一部とりかかった。

D 今後の予定

臨地調査は、調査旅費の許すかぎり、次年度も継続して実施していきたい。カードの意味項目ごとの語形類別の作業も継続しておこなっていく予定である。

発音過程に関する研究

A 目 的

現代日本語の音声の、音韻論上の個々の問題、表現的な個々の特徴などを調音的、音響的、機能的な側面から明らかにすることを目的とする。おもに標準語の音声を分析の対象とするが、今後は比較の必要から、方言や外国語の音声または、聴覚障害者、言語障害者の音声も対象とすることがありうる。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

研究員 高田正治

C 本年度の研究

主として、前年度からひきつづいて、標準語の種々の音声を発音する際の調音器官のうごきの分析を、X線映画フィルム像によって行った。現在までに、単独母音・半母音・両唇音・軟口蓋音についてのトレース（約1,600枚）とそのトレース図の計測が完了している。今年度は、このトレース・計測の作業と並行して、すでに計測されたものの一部について分析をはじめた。

D 今後の予定

次年度は、今年度にひきつづいて、歯茎音・促音・撥音などのトレースと計測（約1,000フレーム）および分析をすすめる予定である。

図形・文字の視覚情報処理過程および読書 過程に関する研究

A 目 的

図形および文字が、感覚伝送系での情報処理、および大脳における神経系の活動の結果として知覚される過程について視覚心理学的立場から実験研究を行う。これにあわせて、読書過程に関する実験研究を行う。

B 担 当 者

言語行動研究部第三研究室

室長 神部尚武 (51.2.1から) なお、眼球運動記録装置の製作にあたっては、非常勤職員齊田真也の協力を受けた。

C 本年度の経過

ミニ・コンピュータ (PDP-11/10) によって制御される文章提示装置を整えた。この装置により、カナ文字による文章を1行30字の範囲で、空間的な配置および時間条件を自由にかえて提示することができる。また、さきに完成していた眼球電位法による眼球運動記録装置に加えて、角膜にうつっている光源の像の動きをとらえることにより眼球運動を記録する装置を整えた。

これらの装置を用いて、読みの過程が、刺激提示条件によってどのように変化するかをしらべる実験を行った。

D 今後の予定

次年度は、さらに実験装置を改良し、文章提示の時間および空間的条件、眼球運動などを手がかりに、読みの過程に関する基礎的な実験的検討を進めていく予定である。

日本言語地図の検証調査

A 目 的

『日本言語地図』に盛られている言語資料の性格を明らかにするために、検証調査を行う。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

室長 佐藤亮一 研究員 真田信治 研究補助員 白沢宏枝

なお、調査実施に際しては、言語行動研究部第一研究室の杉戸清樹、東北大学大学院修士課程在学中の下野雅昭の協力を受けた。

C 本年度の研究

従来を検証調査については、『年報17』以下にその概要を記した。

本年度は、昭和47年度に、愛媛県八幡浜市から宇和島市にかけての地域で行ったアクセント調査（『年報24』参照）の第2次調査を実施した。目標は、アクセントの体系的特徴に地域差が認められる所で、その境界地帯における状況を精細に見ようとするものである。前回の第1次調査では、2市5町にまたがる112か所で各地点1名の中学生（男女）を調査したが、今回は地点を12か所にしぼり、かわりに各地点10名（中学生9名、および参考として老年層から1名）の被調査者を選んで、個人差と地域差とのかわりをみようとした。方法は、前回と同様に、2拍名詞40語について、それぞれの語を文頭に持つ短文を3回繰り返して読ませ、それを録音して分析の資料とした。

調査は、昭和50年9月に実施した。

D 今後の予定

この調査は本年度をもって打ち切り、各調査の詳しい内容および結果については、機会を改めて報告する。

「各地方言資料の収集および文字化」 のための研究

A 目 的

急速に変化し失われつつある方言を、現時点で録音・文字化（標準語訳・脚注つき）し、定本として永久に保存し、国語研究の基本的資料とする。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

室長 佐藤亮一 研究員 真田信治 研究補助員 白沢宏枝

昭和50年度の地方研究員は次の各氏に委嘱し、そのうち、22の府県（*印）の担当者に録音・文字化の委託を行った。

担当地域	氏名	所属機関<職>
北海道	五十嵐三郎	札幌大学<教授>
青森*	松本 宙	弘前学院大学<助教授>
岩手*	本堂 寛	岩手大学教育学部<助教授>
宮城*	加藤 正信	東北大学文学部<助教授>
秋田	北条 忠雄	秋田大学教育学部<教授>
山形*	矢作 春樹	寒河江市立陵南中学校<教諭>
福島	三浦 芳夫	安積商業高等学校<講師>
茨城	金沢 直人	茨城大学教育学部<教授>
栃木	大橋 勝男	新潟大学教育学部<助教授>
群馬*	上野 勇	県立高崎工業高等学校<教諭>
埼玉	井上 史雄	北海道大学文学部<助教授>
千葉*	加藤 信昭	千葉大学教育学部<助教授>
神奈川	齋藤義七郎	
新潟*	剣持隼一郎	長岡工業高等専門学校<講師>

富 山	川本栄一郎	金沢大学教育学部<助教授>
石 川*	岩井 隆盛	金沢女子短期大学<教授>
福 井*	佐藤 茂	福井大学教育学部<教授>
山 梨	清水 茂夫	山梨大学教育学部<教授>
長 野*	馬瀬 良雄	信州大学人文学部<教授>
岐 阜	谷開 石雄	県立岐阜北高等学校<教諭>
静 岡*	日野 資純	静岡大学人文学部<教授>
愛 知*	山口 幸洋	
三 重	廣濱 文雄	天理大学文学部<教授>
滋 賀	笈 大城	県立虎姫高等学校<教諭>
京 都*	佐藤 虎男	大阪教育大学<助教授>
大 阪	山本 俊治	武庫川女子大学<助教授>
兵 庫	和田 實	神戸大学教養部<教授>
奈 良*	後藤 和彦	大妻女子大学<助教授>
和歌山	村内 英一	和歌山大学教育学部<教授>
鳥 取	今石 元久	鳥取大学教育学部<講師>
鳥 根*	広戸 惇	京都家政短期大学<教授>
岡 山	虫明吉治郎	県立玉野高等学校<教頭>
広 島*	室山 敏昭	広島大学文学部<助教授>
山 口	岡野 信子	梅光女学院大学<助教授>
徳 島	遠藤 潤一	徳島大学教育学部<助教授>
香 川	近石 泰秋	県立図書館<館長事務取扱>
愛 媛*	杉山 正世	
高 知*	土居 重俊	四国女子短大・四国女子大学<教授>
福 岡	奥村 三雄	九州大学文学部<助教授>
佐 賀	神部 宏泰	佐賀大学教育学部<助教授>
長 崎*	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部<教授>
熊 本	秋山 正次	熊本大学教育学部<教授>
大 分	種 友明	大分大学教育学部<助教授>
宮 崎*	日高貢一郎	NHK総合放送文化研究所<所員>

鹿児島* 田尻 英三 鹿児島大学教育学部<講師>
沖 縄* 加治工真市 県立沖縄工業高等学校<教諭>

C 本年度の計画

この研究は3か年計画とし、本年度はその第2年次にあたる。

本年度は、前記の22名の地方研究員に対して、担当各府県の方言についての録音・文字化を求めた。内容は、各府県から1地点を選定し、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化（標準語訳・脚注つき）することとした。

別に、研究室員としても、昭和51年2月、鳥取県八頭郡郡家町において、同様の内容についての録音を行い、その文字化をすすめた。この録音・文字化には室員の佐藤、真田、白沢が参加した。

また、昭和51年3月13日に、地方研究員懇談会を開催し、来年度の計画について検討した。参加地方研究員は、加藤信昭<千葉>、山口幸洋<愛知>、馬瀬良雄<長野>、佐藤茂<福井>、岩井隆盛<石川>、佐藤虎男<京都>、後藤和彦<奈良>、土居重俊<高知>、日高貢一郎<宮崎>の9名であった。

D 今後の予定

この研究は、昭和51年度に完結する予定である。来年度は、原則として本年度と同一の地点で、自由会話補遺、場面設定の会話、民話などを録音し、文字化したいと考えている。

明治初期における漢語の研究

A 目的・意義

明治初期は、現代語の源流となった時代であり、日本の近代化が始まった時代である。この近代化に伴い、日本語は大きく変化した。中でも、語彙の変化がはげしく、それは漢語にもっとも著しく現れている。そこで、明治初期の各種文献に現れた漢語の実態を調査し、現在の漢語と比較対照する。さらに、大正期にいたるまでの漢語の調査研究を継続することによって、明治以降における漢語および漢字表記の変遷の条件と方向とを見きわめ現代語成立の歴史的背景を明らかにしようとする。

B 担当者

言語変化研究部第二研究室

室長 飛田良文 (1)~(3) 研究員 梶原滉太郎 (4) 研究補助員 中山典子 (1)~(4)

C これまでの経過

言語変化研究部第二研究室（昭和48年度まで近代語研究室）では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行い、その成果については、そのつど年報または報告書に発表してきた（『年報』7~20および『明治初期の新聞の用語』〈報告15〉参照）。昭和42年度から「明治初期における漢語の研究」に着手し、明治初期漢語辞書8種の総索引を作成し、48年度には『安愚楽鍋用語索引』（資料集9）を刊行した（『年報』21~26参照）。現在、『欧州奇事花柳春話』と『通俗花柳春話』との調査を行っている。

D 本年度の作業

本年度は、次の作業を行った。

- (1) 『花柳春話』の語彙表作成と一字漢語の分析
- (2) 漢語研究のための著書・論文目録の作成
- (3) 近代語資料の文献調査
- (4) 東京日日新聞の用語・用字調査

その結果は、次のとおりである。

- (1) 『花柳春話』の語彙表作成と一字漢語の分析

本年度は『欧州奇事花柳春話』の一字漢語について、文体との関連を調査した。その対応関係の一例を「顔」の場合で示すと、次のとおりである。なお『欧州奇事花柳春話』は漢文直訳体で、『通俗花柳春話』は和文体といわれるものである。

〔顔〕

- A 『欧州奇事花柳春話』に振り仮名のある場合

a 対応する語があり、両文体に振り仮名のある場合

a-1 〔ガン(顔)―おもて(面)〕

- {
- ・シサリニ大ニ悦ヒ喜色顔ニ露ハレテ其夜ハ憂心鬱陶タルノ人ニ非ルカ如シ (欧 2―80ペ2)
 - ・シサリニは喜色面に露れて別人の如く見へにける (通2―73ペ10)
- }

a-2 〔ガン(顔)―かお(顔)〕

- {
- ・客茫然トシテ主人ノ顔ヲ熟視シ且ツ室内ヲ四顧シテ (欧1―8ペ8)
 - ・少年は稍瞬間沈吟たる容貌にて主人の顔を熟視つゝ、又室内を廻視て (通1―11ペ5)
 - ・アリス袖ヲ以テ顔ヲ掩ヒ言ハント欲シテ猶ホ語無シ (欧1―13ペ3)
 - ・アリスは袖以て顔を掩ひ言んとしては猶言ず (通1―16ペ8)
 - ・ベンタドア左手ヲ以テ顔ヲ掩ヒ聲ヲ吞テ泣ク (欧3―57ペ9)
 - ・ベンタドアは左手を以て顔を掩ふて聲を呑み餘所に洩さで泣居たる (通3―70ペ6)
- }

・マルツラバース一女ノ手ヲ執テ默シ女ハ袖ヲ以テ顔ヲ掩ヒ潸然トシテ泣クカ如キアルヲ看ル (欧3—58ペ5)

・マルツラバースは女子の手を執り女子は袖以て顔を掩ひ泣けるが如き状を看る (通3—71ペ3)

・ラムリ此語ヲ聞キ愕然タリ唯々叔父ノ顔ヲ熟視スルノミ (欧3—90ペ1)

・ラムリは之を聞や否打驚ける容色して叔父の顔をは視るのみ (通3—113ペ11)

・醫顔ヲ傾テ曰ク君、僕ノ意ヲ誤察セリ (欧3—107ペ7)

・醫師は顔を背けて言やう和若は今朝しも僕の申せしことを誤ち給り (通3—133ペ5)

・フロレンスハ忽チ顔色ヲ變ジ雙手ヲ以テ顔ヲ掩ヒ慚涙潸然タリ (欧4—48ペ3)

・フロレンスは忽地に雙手を擧て顔を掩ひ未だ此年兒の初戀に羞らふ涙の村時雨夫こふ鹿のそれならで聲も得たてず泣居たり (通4—61ペ5)

・アリス一聲發揚シテ雙手ヲ揚ゲマルツラバースノ肩頭ヲ擁シ顔ヲ其胸頭ニ置テ餘悦涙ヲ滲ラス (欧4—107ペ9)

・アリスは一聲發揚兩手を懸てマルツラバースの兩の肩頭打擁き胸頭に顔をあて悦し涙に暮居たる。(通4—143ペ12)

・口自ヅカラ箝シ思ハズ默然トシテアリスノ顔ヲ看ル (欧5—39ペ6)

・忽地に口黙りて語なくアリスの顔を一視て居れり (通4—170ペ10)

a—3 [ガン(顔)—かおばせ(顔色)]

・彼レ奮タニ顔ノ美ナルノミナラス心モ亦頗ル美ナリ (欧3—123ペ9)

・奮顔色の美なるのみか心も眞に麗しく世人は呼で美且賢とす (通3—151ペ12)

a—4 [ガン(顔)—かんばせ(顔色)]

・是汝ノ再ビ父ノ顔ヲ拜セサルヲ得サル所以ナリ (欧2—84ペ10)

・再び父が顔色を拜む場合になりたるなりと (通2—81ペ4)

a—5 [ガン(顔)—みめ(容貌)]

・婦女ノ愛ヲ得ルハ顔ノ醜美ニ在ラス即チ言語動作及ヒ生得ノ威望ニ在リ (欧2—14ペ10)

・抑婦女の愛を得るは容貌の醜美に由べけれど物の言ごま動作自然の威望も亦愛

し を受る基本の一なり (通1—130ペ8)

b 対応する語のない場合

b—1 [(顔)一なし]

{ ・而シテ少女ノ顔ヲ願ミ心中一考アル者ノ如ク (欧2—97ペ11)

{ ・なし

{ ・此ノ女ヤ一時良人ノ顔ヲ見テ喜悅セシモ忽チ變シテ憂愁トナリ (欧3—59ペ4)

{ ・なし

{ ・男其傍ラニ坐シ喜色顔ニ見ハレ他ヨリ之ヲ見レハ心魂已ニ天外ニ飄揚スルカト疑フモ亦可ナリ (欧3—98ペ5)

{ ・なし

{ ・語了テカメロンノ顔ヲ見ル (欧5—34ペ1)

{ ・なし

{ ・言了テアリスノ膝前ニ踞シ仰ヒデ其顔ヲ熟視ス (欧5—34ペ7)

{ ・なし

B 『欧州奇事花柳春話』に振り仮名のない場合

a 対応する語があり、『通俗花柳春話』に振り仮名のある場合

a—1 [(顔)一かお(顔)]

{ ・アリスノ顔色赧然トシテ羞ヲ含ミマルツラバースノ顔ヲ見ルニ堪エス (欧1—58ペ2)

{ ・アリスはいとゞ差らひて其顔をさへ得擡ざれば (通1—68ペ12)

{ ・マルツラバース ベンタドアノ顔ヲ望ミ問テ曰ク今君ノ言ハ盡ク實際ノ経験ヨリ出ルヤ (欧2—19ペ1)

{ ・顔望みてマルツラバースは今や和君の宣はするは抑實地のことなるやと (通1—134ペ1)

{ ・唯タダービルノ顔ヲ熟視スルノミ (欧2—128ペ5)

{ ・故ものを言出ず唯其顔を熟視のみ (通2—131ペ3)

{ ・其顔色拾モ蔑視スルカ如シ半バ顔ヲ背ヒテ (欧3—96ペ7)

{ ・熟々侯を視むる顔は拾も蔑視ものゝ如く顔を左方にふり背け (通3—120ペ7)

- ・フロレンスノ顔ヲ見テ又曰ク請フ羞色ヲ帯ル勿レ (欧4—44ペ3)
 - ・フロレンスの顔を見て何ど羞たまふことあらんと (通4—56ペ12)
- ・言了テ故ラニマルツラバースノ顔ヲ見ル時彼レ黙シテ言ハズ (欧4—108ペ1)
 - ・言了テ故ラニマルツラバースノ顔ヲ見ル時彼レ黙シテ言ハズ (通4—144ペ4)

a—2 [(顔)一かおばせ(顔貌・容貌)]

- ・アリス頭ヲ振テ曰ク否々妾, 君ノ顔ヲ拜スルヲ得ハ忽チ疲勞ヲ忘ルヘシト (欧1—26ペ9)
- ・アリスは頭を打振て否々君の顔貌を拜する時は忽に妾の疲勞は醫べしと (通1—35ペ7)
- ・ベンタドア斜ニマルツラバースノ顔ヲ看テ (欧3—41ペ3)
- ・ベンタドアはマルツラバースの容貌を斜に看遣て (通3—49ペ10)

a—3 [(顔)一こうべ(頭)]

- ・此時アリス始メテ顔ヲ擡ゲ (欧1—58ペ4)
- ・アリスは漸くに頭を擡て (通1—69ペ1)

b 対応する語のない場合

b—1 [(顔)一なし]

- ・此時ヤ少女ノ眼モ亦客ニ注キ羞色顔ニ顯ハレテ (欧1—8ペ10)
- ・なし
- ・アリスモ亦マルツラバースノ顔ヲ望ミ (欧1—33ペ2)
- ・なし
- ・マルツラバース其心情ノ切ナルヲ察シ顔ヲ看ルニ忍ヒス (欧1—52ペ7)
- ・なし
- ・若シ君ノ喜笑歡話ノ顔ヲ思ヘハ妾ノ心眞ニ喜悅ニ堪エス (欧1—62ペ10)
- ・なし
- ・故ニ若シ君ノ嚴威默思ノ顔ヲ思ヘハ妾ノ心眞ニ恐怖スヘシ (欧1—62ペ9)
- ・なし
- ・マルツラバース (中略) 手ヲ以テ顔ヲ掩ヒ榻ニ凭テ起タス (欧1—82ペ4)
- ・なし

- { ・ 幼児ノ顔色玉ノ如ク仰ヒテ母ノ顔ヲ望ム (欧 2—75ペ 6)
- { ・ なし
- { ・ 身短シテ顔瘦セ黒髪長ク垂レテ双肩ニ及ヒ (欧 2—49ペ 2)
- { ・ なし
- { ・ ラムリ眸ヲ正フシテフロレンスノ顔ヲ熟視シ (欧 3—104ペ 4)
- { ・ なし
- { ・ フロレンス羞色顔ニ見ハレ (欧 3—129ペ 7)
- { ・ なし
- { ・ マルツラバースノ顔ヲ仰視シテ低聲ニ曰ク (欧 4—107ペ 11)
- { ・ なし
- { ・ 一女榻下ニ踞シテ顔ヲ君ノ膝上ニ安キ戯敬涕泣シテ人ノ室内ニ入ルヲ知ラズ (欧 5—47ペ 5)
- { ・ なし

以上を整理すると次のようになる。

- (A) 『欧州奇事花柳春話』に振り仮名のある場合
- a 対応する語があり、両文体に振り仮名のある場合
 - a—1 [(顔)―おもて(面)] 1
 - a—2 [(顔)―かお(顔)] 9
 - a—3 [(顔)―かおばせ(顔色)] 1
 - a—4 [(顔)―かんばんせ(顔色)] 1
 - a—5 [(顔)―みめ(容貌)] 1
 - b 対応する語のない場合
 - b—1 [(顔)―なし] 5
- (B) 『欧州奇事花柳春話』に振り仮名のない場合
- a 対応する語があり『通俗花柳春話』に振り仮名のある場合
 - a—1 [(顔)―かお(顔)] 7
 - 2 [(顔)―かおばせ(顔貌・容貌)] 2
 - 3 [(顔)―こうべ(頭)] 1

b 対応する語のない場合

b-1 [(顔)ーなし]

12

(A)の場合は対応のみられるものが5種類あり、〔ガンーかお〕が圧倒的である。また、いずれも〔漢語ー和語〕の対応関係になっている。したがって『欧州奇事花柳春話』の漢文直訳体と『通俗花柳春話』の和文体は、文章を構成する語の語種（漢語と和語）と密接な関係にあることを示している。

次に、(B)のaを(A)のaと比較すると、『通俗花柳春話』の振り仮名に示された和語〔(顔)ーかお〕が圧倒的で(A)の場合と共通している。したがって『欧州奇事花柳春話』にみられる振り仮名なしの(顔)も、ガンと読んでよいのではないかと思われる。

(2) 漢語研究のための著書・論文目録の作成

前年度に引き続き、漢語に関する研究文献を収集した。

(3) 近代語資料の文献調査

広島市立中央図書館蔵の浅野文庫（広島藩・浅野家旧蔵書）の漢籍の句読点についての調査を行った。3月5日、6日の二日間。担当は飛田良文。調査にあたっては、司書井上博允、大谷美津子両氏のお世話になった。

(4) 東京日日新聞の用語、用字調査

前年度に続き、カードの点検および語彙表の作成を行い、明治10年11月10、12、13日、明治20年11月10、11日、明治30年11月10、11日、明治40年11月10日、大正6年11月10日、昭和2年11月10日、昭和12年11月10日の11日分の語彙表を作成した。

E 今後の予定

来年度は、本年度の作業を継続し、下記の作業を行う予定である。

- (1) 『花柳春話』の自立語索引の作成と分析
- (2) 漢語研究に関する著書・論文目録の作成
- (3) 近代語資料の文献調査
- (4) 東京日日新聞の用語・用字調査

幼児・児童の認知発達と語の意味の習得 に関する調査研究

A 目 的

幼児・児童における母国語の習得過程、および言語の習得と幼児・児童の
人間的諸能力の発達との関係を、科学的に明らかにすることは、言語の教育
の上で、まず解明されなければならない基本的な課題である。従来も、これ
らの問題を志向して研究してきたが、昭和49年度より改めてこの問題に着
手、その基礎研究として、「幼児・児童の関係語の理解と習得過程の実験」、
および「幼児の言語および学習行動の観察」を継続する。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室

室長 村石昭三 2 主任研究官 大久保 愛 1—(2) 研究員 岩
田純一 1—(1), 2 川又瑠璃子 2

なお、実験に際しては、別掲の協力学校・協力園の協力を得た。

C 本年度の作業

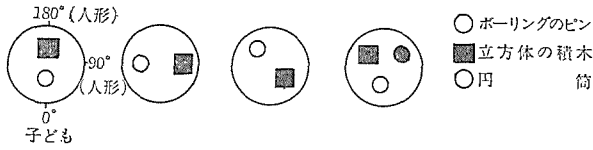
1. 幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査

(1) 幼児・児童の関係語の理解と習得過程の実験

A 空間認識における言語化経験の効果に関する実験

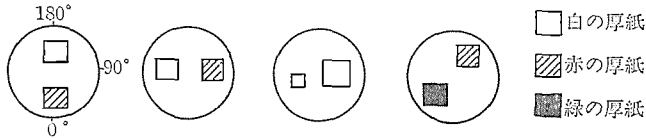
6歳児110名と7歳児（小学1年生）60名、計170名について、「左右、
前後、ななめ」など、空間関係語を取り上げて、次のような実験を行っ
た。

a 事前テスト



子どもに、「人形の場所（90°と180°）から見れば、盤の上の積木やピンなどは、どのように並んで見えるかな」と問い、盤の上と同じ材料で予想構成させる。

b 挿入経験



- | | | |
|-----------|---|----------------------------------|
| A群（盤を回す群） | } | I条件：刺激言語化条件 |
| | | II条件：関係語（みぎ、ひだり、まえ、うしろ）
言語化条件 |
| | | III条件：観察のみの条件 |
| B群（盤を回る群） | } | I条件：刺激言語化条件 |
| | | II条件：関係語言語化条件 |
| | | III条件：観察のみの条件 |

事前テストの成績から各I、II、III条件に属する者は、できるかぎり等質のグループに分けられている。

A群を例にとり、その方法を少し述べる。

I条件：0°→90°、0°→180°と盤を回し、各々の位置（0°、90°、180°の位置）で「右にあるのは赤なの？ 白なの？」、「左にあるのは赤なの？ 白なの？」と質問して刺激属性（アカまたはシロ）を言語化させながら観察させる。その後、ふたたび盤を元の位置（0°）に戻して記憶構成課題を行わせる。

Ⅱ条件：「赤は右にあるの？ 左にあるの？」、「白は右にあるの？ 左にあるの？」のように、ヒダリ、ミギの関係を言語化させる。その他は条件Ⅰと同じ手続。

Ⅲ条件：90°、180°に盤を回し単に黙って15秒間観察するのみの条件(ただし7歳児はB群のみを行った)

c 事後テスト

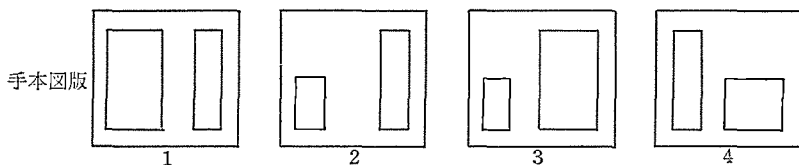
事前テストと同じ課題内容で、当該の年齢の子どもにおいて、言語化の経験が、空間の相対性認識に及ぼす効果をみる。

なお、この実験に補足的に、左右、前後の語の意味の相対性理解をみる調査も行った。

B 幼児の伝達能力(レファレンシャル・コミュニケーション)に関する予備実験

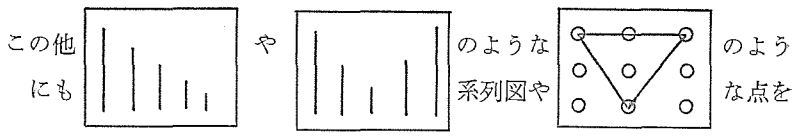
a 欠落課題

5歳児, 6歳児合計42名



上のように、高さや太さの異なる2図形が書かれている図版を1枚ずつ見せる。それと同時に右側の片図形のみ欠落している以外は手本図版と同じ図版をいっしょに見せ、どの図形が手本カードに比べて欠けているかを確認する。その後、その欠落図版を、ついたてをはさんで見えない相手(実験補助者)に渡す。

子どもの課題は、自分の手元にある手本図版と同じような図を、補助者が欠けている部分に書けるように相手に、ことばで伝達することである。なお、この課題の前に、手本図版を見せ、左右の図形が、どのように異なるかを言語化させている。

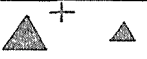
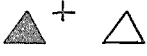

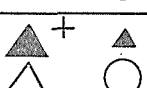


結び、逆三角の図が描けるように相手に知らせる課題なども同じ手続きで行われた。

下図のような組合せを考えると、同じ刺激（クロイ、大キナ三角）でも、選択肢による状況に応じて必要十分な情報内容は異なる。

子どもが、どのように必要十分な情報を取り出すことができるかどうかをみる。

b あてっこ課題

選択刺激群	必要十分情報
	オ オ キ イ
	ク ロ イ
	オオキイ・サンカク
	オオキイ・クロイ・サンカク

＋の記号は絵の隠れている方

テスト補助者は、子どもと並んで座る。実験者は色（白 vs 黒）、形（丸 vs 三角）、大きさ（大 vs 小）の3次元、2値で変化する厚紙の図形を組合せる（2枚～6枚）。そのうちの1つの図形の下には、リンゴの絵がある。実験者は、どの図の下に絵（リン

ゴの絵）があるかをあらかじめ子どもに知らせる。子どもの課題は、実験補助者に、どこに絵があるかを、ことばで教えることである。

協力学校：東京、文京区立明化小学校（校長 橋田 豊夫）

協力園：東京、板橋区、帝京幼稚園（園長 沖永 キン）

東京、北区立赤羽西保育園（園長 土屋ケイ子）

(2) 幼児の言語および学習行動の観察

被験者：1歳児1名 小泉健彦（昭和49年3月3日生まれ）

方法：(1)毎月誕生日の同日前後および半月後の定期的追跡録音

母親にそれまでの言語および学習行動の発達に関する報告を聞

いた後、約1時間、被験者と母親、調査者との会話を録音する。
(2)母親による随時委託録音。

満2歳の誕生日には24時間調査を実施。

2. 報告書等の作成

「就学前児童の言語能力に関する全国調査」に関する報告のうち、「幼児の読み書き能力」に続く第2報告「幼児の文法能力」について脱稿した。

「現代児童・生徒の言語能力の動態調査」に関する報告については、必要な資料の整理分析を進めた。なお、「言語発達文献——展望・リスト」についても整理分析を続行した。

D 今後の予定

昭和51年度は前年度に引き続き、「幼児・児童の認知発達と語の意味の習得に関する調査」を継続しながら、将来の「幼児・児童の語彙調査」のための研究的基礎を固めていく予定である。

電子計算機による言語処理に関する基礎的研究

A 目的・意義

電子計算機を使って、日本語のデータを処理しようとする、ことばや文字を扱わせる上で、解決すべきさまざまな問題が生じてくる。たとえば、日本語の活用現象の処理や、漢字の処理などは、その例である。また、電子計算機の高速度と大量処理の能力を利用して、日本語の諸性格を研究すると、従来の研究方法では、とらえられなかった研究課題が浮かびあがってくる。文字連続や音素連続の研究、語句の相互連続の研究、あるいは、用語の自動検索に基づく語彙や文法、文体等の研究などは、その例であり、国語研究における電子計算機の利用価値は、今後、ますます、高まってくることが予想される。しかし、上記のような問題を解決したり、課題を研究したりするためには、多くの基礎的な調査と方法論の確立が、まず必要である。

この研究の当面の目的は、こうした問題を研究していくための、基礎的な研究資料を作成し、それに基づいて、日本語の電子計算機処理の基礎理論（アルゴリズム）を検討するところにある。したがって、その成果は、国語資料の機械処理に理論的根拠を与え、各種の言語情報処理の進展にも役立つものとなる。

B 担当者

言語計量研究部第一研究室

室長 土屋信一 研究員 中野 洋 齋岡昭夫 研究補助員 堀江
久美子 岡田敏子 (50.9.30退職) 長田厚子 (50.11.1採用)

言語計量研究部第二研究室

室長 田中章夫 研究員 佐竹秀雄 研究補助員 田島道子

言語計量研究部第三研究室

室長 石綿敏雄 主任研究官 斎藤秀紀 (50.7.1から) 研究員 米田
正人 研究補助員 小高京子 沢村都喜江 科野千夏(旧姓白木) 竹内
純子

C これまでの研究経過

昭和41年度に電子計算機が導入されて以来、大量語彙調査の調査方式の検討と調査システムの開発のほか、「言語単位の自動分割」「言語データの機械処理法」「構文解析の自動化」「文字の連続確率(エントロピー)」「用語検索システムの開発」「言語情報処理のための言語分析」などの研究を行い、その成果は、『電子計算機による国語研究』(報告31)ならびに、『電子計算機による国語研究Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ』(報告34・39・46・49・51・54)に公表してきた。また、その途中経過や中間結果は、部内報告『LDP』に随時発表している。

以上のほか、昭和48年度には、文部省の科学研究費補助金(試験研究費)による「電子計算機による総合語彙表作成のための基礎的研究(研究代表者・岩淵悦太郎)」として、既成の用語索引および分類語彙表の入力データの作成を行い、また、古代語および近代語の言語資料五作品(『今昔物語集巻26』『同巻30』『心中天網島』『浮世風呂』『浮世床』)の文脈つき用語索引を作成した。さらに昭和49年度には「作品の用語検索組織の研究(研究代表者石綿敏雄)」として、用語検索システムの開発研究および近代語の資料として、山田美妙の『武蔵野』と坪内逍遙の『当世書生気質』(十回まで)の文脈つき用語索引を試作した。

D 本年度の研究

本年度の調査研究は、以下のとおりである。これらは、昭和51年3月24日に行われた研究発表会の要旨、および内部資料として発行されている『言語計量研究部季報(1975春～1976春)』に収められている。

I. 調査システムの開発

① 語彙調査システム

高校教科書の用語調査システムは、データ入力部分と KWIC 作成部分が完成し、「高校教科書用語用字調査システム（中間発表）」（中野・斎藤・米田・科野・竹内）を、『季報1975冬』に発表した。また、新聞語彙調査の短単位データをキーワードとした KWIC 作成ルーチンが完成し、「新聞短単位処理システム」（石綿『季報1975春』）、「新聞語彙調査短単位の DATA MAINTENANCE」（堀江『季報1975春』）、「新聞語彙調査 KSIN システムの概要」（竹内『季報1976春』）を発表した。

② 用語検索システム

用語検索システムの開発に関しては、語彙表作成出力ルーチンを含めたシステムが完成し、「用語検索システムについて」（石綿『季報1975春』）・「カードによる情報の入力、同語異語の判別……語彙検索のための実験プログラムの試作」（石綿『季報1975秋』）を発表した。

③ 新しい言語処理システムの開発

新しい自然言語解析システムが研究・開発された。このシステムは、どんな文法理論にも利用でき、どんな言語でも分析することができる。また、同音語の判別、同語異語の判別、仮名・漢字変換にも用いることができ、各種文法理論のチェック、語彙記述のチェックにも利用できる。これは「自然語処理システム IRIS 0A の開発」（石綿『季報1976春』）として発表された。

また、高速漢字プリンター・OMR 等を使用したターン・アラウンド・システムが完成し、「漢字プリンタによるターン・アラウンド・システム」（斎藤・研究発表会）を発表した。また、単位切り・読み仮名つけ・品詞情報つけ・分類番号つけを自動化し、KWIC 索引を作る一貫処理システムの試作が行われ、「言語処理における一貫処理システム」（中野・研究発表会）を発表した。

II. 語彙・文字・表記に関する研究

① 語彙調査に関するもの

高校教科書の用語調査に関しては、これまで提出された種々の言語単位と今回の調査単位との比較・検討をした「高校教科書用語調査における言語単位」(瀨岡・研究発表会)、同語異語判別について言及した「代表形のつけ方」(土屋『季報1975秋』)が発表された。また、語彙の分析において問題になる形容動詞語幹の認定について考察を加えた、「形容動詞の研究(一)」(瀨岡『季報1976春』)が発表された。語彙表出力の際に問題になる見出し語の配列について、「国語辞典における見出し語の配列について」(中野・岡田『季報1975夏・秋』)が発表された。

② 語彙の量的構造に関するもの

語彙の使用度数分布について考察した「文章の語彙構造に関する探索的研究(1, 2)」(中野『季報1975秋・冬』)、助詞助動詞の連接形態を多変量解析の手法によって分析した「助詞助動詞の計量的分析」(米田・研究発表会)が発表された。

③ 文字・表記の研究に関するもの

これらについては、「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」の項(47ページ)に一括して述べた。

E 今後の予定

来年度は、継続研究の他、高校教科書の用語用字調査に伴う機械処理システムおよび集計分析システムの開発・試作、その他の実験的研究が行われる。

漱石・鷗外の用語の研究

A 目的・意義

この研究は、「電子計算機による言語処理に関する基礎的研究」の一環として開発した「索引作成と用語検索の処理システム」を実際に使用して、夏目漱石・森鷗外の作品の用語を分析するものである。ただし、当面は言語情報（原文および索引の磁気テープファイル）の蓄積と、処理システムの改良・拡張が中心となっている。

B 担当者

言語計量研究部第一研究室

室長 土屋信一 研究員 中野 洋 齋岡昭夫 研究補助員 堀江
久美子 岡田敏子 長田厚子

なお、同研究部第三研究室の全員が協力した。

C これまでの研究経過

46年度までに開発された KWIC システム（第一システム）を使用して、漱石の『三四郎』『硝子戸の中』『行人』、鷗外の『高瀬舟』『青年』のプレエディット（単位切り・清書・付加情報付け等の前処理）・漢テレさん孔入力および索引作成の電子計算機処理を実施し、索引ファイル（磁気テープ）を作成した。また、これらについては、全文片仮名表記の KWIC 索引を出力印字した。

この第一システムは、従来のラインプリンタで出力する方式だったため、全文片仮名で印字するか、またはアルファベット・アラビア数字・その他の記号を使って漢字や平仮名を記号化して印字する whichever の方法しかなかった。一方、数千字の文字パターンを内蔵した高速漢字プリンタが実用化の

段階に達してきた。そこで高速漢字プリンタを用いる類別用語検索システム（第二システム）を作成し、鷗外の『寒山拾得』『雁』の計算機処理を実施し、索引ファイルを完成させ、さらに外注によって、この二作品の漢字仮名交り KWIC 索引を出力印字した。また、上記のほか、漱石の『坊っちゃん』『草枕』『こころ』、鷗外の『山椒大夫』『渋江抽斎』をこの第二システムで機械処理すべく、プレディット・さん孔・機械処理に着手した。

なお、49年度末から当研究所にも高速漢字プリンタが導入され、第二システムの各索引はもちろん、第一システムのものもすべて漢字仮名交り KWIC で出力することが可能となった。

D 本年度の研究

第一システムによる索引作成は、本年度は行わなかった。かわって、前年度末に導入された高速漢字プリンタを使う第二システムによって、次の五作品の索引作成を進めた。作品ごとにその成果を示す。

『山椒大夫』……前年度末までに電子計算機処理を終えていたので、漢字プリンタで KWIC 索引を出力印字した。出力した索引を点検した結果、修正すべき点が発見されたので、修正事項を整理・清書し、漢テレさん孔した。

『坊っちゃん』『草枕』……いずれも前年に引続き 計算機処理を施し、索引ファイルの作成・KWIC 索引の印字出力を進めた。この二作品は、出力した索引の検査の段階まで終了した。

『渋江抽斎』……前年度末までに漢テレさん孔まで終了。本年度は機械処理オペレートの間段階までで終わった。

『こころ』……プレディット（単位切り・清書・付加情報付けなど）の段階まで終わった。

E 今後の予定

上述の五作品の索引ファイルの修正・更新および修正ずみの漢字仮名交り KWIC の作成を順次進めるとともに、これらのファイルをもととして、漱石・鷗外の用語の研究を、語彙・文法・表記その他さまざまな面から行う。

新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究

A 目的・意義

現代語の表記についての調査研究の一環として、新聞をとりあげ、その表記の実態を分析するとともに、漢字についての統計的調査を行い、国語の正書法を確立する上に役立つ基礎資料を得ることを目的とする。

B 担当者

言語計量研究部第二研究室

室長 田中章夫 研究員 佐竹秀雄 研究補助員 田島道子 非常勤
職員 野村雅昭 (50.6.1~7.31)

C これまでの経過

昭和41年の朝日・毎日・読売の3紙1年分の全紙面の60分の1を抽出して作成した「新聞の用語・用字調査」のデータによって前年度までに、つぎに掲げる各種表記集計表を出力した。

全体五十音順表記表・全体使用率順漢字表・層別使用率順漢字表・用法別漢字表・品詞別表記表・漢字使用度数分布表・漢字音訓別集計表・層別漢字分布表・まぜ書き語集計表・仮名書き語集計表

上記集計表の分析を行うとともに、漢字に関する部分については、報告書の原稿執筆・作表作業を進め、刊行の準備に当たった。

D 本年度の作業

報告書『現代新聞の漢字』（報告56）の原稿整理・印刷校正作業を行い刊行した。

また、土屋信一は、新聞の用語用字調査のデータに基づいて仮名書き語の分

析をまとめ、田中章夫、佐竹秀雄は、表記調査の方法論の研究を行い、3月24日の国立国語研究所研究発表会において、それぞれ、下記の研究発表をした。

土屋信一「新聞語彙調査のカタカナ表記語」

田中章夫「漢字の計量的調査における問題点」

佐竹秀雄「表記のゆれを測る」

以上で、標記のテーマのもとに進めてきた調査研究を終了する。

新聞用語調査の短単位語処理

A 目 的

昭和41年の朝日、毎日、読売3紙を対象として行った新聞用語の調査では、すでに調査対象全体について、長単位語の処理を終わり、『電子計算機による新聞の語彙調査IV』（報告48）を刊行した。そのあとをうけて調査対象全体について短単位語の処理を行う。

B 担 当 者

言語計量研究部第三研究室

室長 石綿敏雄 主任研究官 斎藤秀紀 研究員 米田正人 研究
補助員 小高京子 沢村都喜江 科野千夏 竹内純子

なお、同研究部第一研究室および第二研究室の全員が協力した。

C これまでの経過

新聞用語調査は『電子計算機による新聞の語彙調査IV』（報告48）を刊行して、長単位語による処理を一応終結しているが、その作業のなかで、短単位処理のための紙テープを作成してあるので、これを編集し、長単位による入力原文とあわせて、短単位処理ができるような準備ができていた。

D 本年度の研究作業

- (1) 短単位入力紙テープのデータ・エラー（記入形式、記入内容、さん孔テープ上の機械に原因する誤り）をチェックするプログラムを作成した。
- (2) 同上のプログラムを機械にかけてエラー・リストを作った。
- (3) エラー・リストにより紙テープを修正した。
- (4) チェックの済んだデータから、短単位処理用の辞書を作るプログラムを

作り、これを実行した。辞書には長単位を短単位に切り、漢字にかなをつけるための情報がはいつている。

- (5) 新聞用語調査の入力原文（長単位語に区切られている）を一つ一つの長単位語に分割し(a), 排列を辞書の順に変え（ソート・マージ）(b), 辞書（エントリーは約二十万語）を引いて長単位語を短単位語に変え、漢字にかなをつける情報を付加し(c), 原文順に排列を変え（ソート・マージ）(d), 短単位による文のレコード（磁気テープ上の記録単位）をつくり(e), 以後の教科書用語処理システムに接続するための短単位レコードを作成する(f), という一連のプログラムを作成した。教科書処理システムの一部を修正した。
- (6) データ約五千語を取り全体のシステムのチェックを行い、最終 KWIC（用例つき用語索引）を出力した。
- (7) 全データにつき上記(5)のシステムのうち(c)までの機械処理を行った。

E 今後の予定

上記(5)(d)から作業を継続して行う。

高校教科書の用語調査

A 目 的

現代日本語の用語用字の実態を明らかにするために、これまで、新聞、雑誌九十種、総合雑誌、婦人雑誌を対象として調査を重ねてきた。以上の諸調査のあとを受けて、国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時必要となる用語用字の実態を明らかにすることを目的として、高校教科書について用語用字の実態を調査する。

B 担 当 者

言語計量研究部

部長 斎賀秀夫 第一研究室、第二研究室、第三研究室の全員

C これまでの経過

この調査は昭和49年に発足した。49年度の作業は

- (1) 調査対象の選定……高校の社会科、理科、数学の教科書10冊を対象として選定した。すなわち、政治経済、倫理社会、地理B、世界史、日本史、生物I、化学I、物理I、地学I、数学Iである。範囲を社会科、理科、数学に限ったのは、説明文を調査対象にするためである。
- (2) 調査項目の決定……用語用字調査の結果として、用語表、用字表、分析項目を検討、決定した。
- (3) 調査単位の決定……文節から助詞を切り出したもの(W単位)と、形態素に近いもの(M単位)、二種を決定した。
- (4) 処理過程の決定……(a)台帳作成・管理、(b)文情報の記入、(c)単位切り・検査、(d)清書・検査、(e)データさん孔、(f)原文の機械読みこみ、(g)出力、(h)校正、(i)修正、(j)再読みこみ処理(通し番号など)、(k)ミニKWIC作

成, (l)出力, (m)校正, (n)修正, (o)最終ファイル, (p)比率計算, (q)語彙表作成, (r)文脈つき KWIC 作成出力, (s)文字集計, (t)漢字表出力, (u)文字 KWIC 作成出力など。

- (5) 作業の実施……上記(4)の過程に従い, プログラムを策定し, (4a)までを終了, 一部データについて単位切り(4c)を行った。

D 本年度の研究作業

1) 機械処理プログラムの作成……機械処理を進めるためのプログラムを作成した(4lまで)。

2) データの人手および機械による処理……前年度のあとを受けて, 全体については(4b)までを終了。一部データ(全体の20分の1の標本および政治経済)についてはデータパンチ(4c)を経て漢字プリンタの出力(4gおよび4l)を行い, 校正(4m)を実行中。

各教科別に本年度分の作業を示せば

- a) 政治経済……データパンチ, 漢プリ(漢字プリンタ)出力, 機械によるチェック
- b) 生物 I ……清書, 情報記入, 検査, データパンチ。
- c) 物理 I ……清書, 情報記入, 検査, データパンチ。
- d) 化学 I ……M単位切り, 清書, 情報記入。
- e) 地学 I ……W単位切り, 検査, M単位切り, 清書, 情報記入, 検査。
- f) 地理 B ……W単位切り, 検査, M単位切り, 清書, 情報記入。
- g) 日本史……W単位切り, 検査, 情報記入。
- h) 世界史……W単位切り, 検査, M単位切り, 検査, 清書, 情報記入。
- i) 倫理社会……W単位切り, 検査, M単位切り, 検査, 清書, 情報記入, 検査, データパンチ。
- j) 数学 I ……台帳作成, M・W単位切り, 検査, 情報記入。
- k) 全体 1/20標本……情報記入検査, データパンチ, 漢プリ出力, 機械チェック, ミニ KWIC。

E 今後の予定

上記(C 4)の予定に従い、作業を継続する。

日本語教育のための基本的語彙に関する調査研究

A 目 的

外国人の日本語学習者が、専門領域の研究、又は職業訓練にはいる基礎として、習得すべき基本的な日本語の語彙について標準を立てることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育部日本語教育研究室

部長 林 大 (51.1.16 所長昇任, 以後3.31まで部長事務取扱)

室長 水谷 修 研究員 高田 誠 志部昭平 (50.10.1採用)

非常勤職員 山本妙子 (50.12.31まで)

C 本年度の作業

全体計画としては3年間を予定しており、第1年次、第2年次には『分類語彙表』(資料集6)に収録された語についての専門家判定による調査をおこない、第3年次には文法、意味用法、使用率、学習目的、外国語との比較等の観点から検討を加え、基本語彙資料を作成しようとするものである。

本年度は、中心になる調査の『分類語彙表』(資料集6)収録語4万弱のうちほぼ2万語について判定を依頼し、回収を完了した。判定を委嘱した専門家は、当研究所員12名、及び、所外の日本語教育関係者10名である。判定を委嘱した専門家とは、作業開始前に打合せ会を開き、判定方法などにつき理解の統一をはかった。委嘱した所外の専門家は以下にあげるとおりである。浅野百合子(言語文化研究所附属東京日本語学校講師)、伊藤芳照(東京外国語大学外国語学部附属日本語学校助教授)、今田滋子(国際基督教大学教養部専任講師)、加藤彰彦(実践女子大学短期大学部教授)、川瀬生郎(東京外国語大学外国語学部附

属日本語学校助教授), 窪田富男 (東京外国語大学外国語学部助教授), 武部良明 (早稲田大学語学教育研究所教授), 玉村文郎 (同志社大学文学部助教授), 森清 (言語文化研究所附属東京日本語学校専任講師), 森田良行 (早稲田大学語学教育研究所教授)

判定結果の集計には計算機を使用するので, その準備としてコード化を進め, 収録語数のほぼ半分についての作業を終了した。

D 今後の予定

51年度も, 本年度にひきつづき『分類語彙表』(資料集6)の未判定分約2万語について専門家判定を実施し, コード化, パンチカード作成作業をすすめ, また, 判定を委嘱した専門家とも連絡をとり, 第3年次以降の検討作業計画を作りあげる予定である。

日本語教育に関する既存の研究成果の調査研究

A 目 的

外国人に学習させるための基礎となる日本語そのものの言語学的研究と、外国人に対する日本語教育の内容・方法に関する基礎的研究の確立が目的である。

B 担 当 者

日本語教育部日本語教育研究室

室長 水谷 修 研究員 高田 誠 志部昭平

C 本年度の作業

前年度にひきつづき、「日本語以外の言語を母語とするものに対する日本語の教育」に関する教材、文献等の収集整備をすすめるとともに、「日本語の比較対照的研究」に関する資料の収集と研究方法の探索に重点をおいて研究活動をつづけた。比較対照的研究については、その一般的方法論の探究を目指した。すなわち、日朝両語の比較対照に関するもの、言語行動様式の比較対照的研究にともなう準備的なものを中心として考えた。

D 今後の予定

来年度以降は基礎的資料の収集については、重点を「各国における異言語使用者に対する自国語教育に関するもの」に移すとともに、比較対照研究領域では、一般的方法論の模索とともに、個別言語との対照研究を現実化させ、日独あるいは日朝の対照研究をおしすすめることになろう。言語行動様式の対照的研究も具体的に展開することを予定している。

日本語教育の現状（内容と方法）についての 実態の調査

A 目 的

外国人に対する日本語教育の内容・方法に関する基礎的研究の一環として日本語教育の現場に接触することにより、内容・方法上の問題点を明確にし、日本語教育研究上の方法論と具体的方策を探究しようとするもの。

B 担 当 者

日本語教育部日本語教育研究室

室長 水谷 修 研究員 高田 誠 志部昭平

C 本年度の作業

1. 日本語教育研究連絡協議会の開催……教育目的により区分されたいくつかのグループのうち、本年度は「年少者に対する日本語教育機関——外国人学校等」の代表者（聖心インターナショナルスクール、東京中華学校、リセフランコ・ジャポネ、国際聖マリア学院、西町インターナショナル、東京ドイツ学園、アメリカンスクール・イン・ジャパン、クリスチャン・アカデミー・イン・ジャパン、玉川学園高等部、サンモール学校、名古屋国際学園、横浜山手中華学校、カナディアン・アカデミー、ステラマリス・インターナショナル・スクール、立川アメリカン・スクール、横田ミドルスクール、座間ハイスクール、キニック・ミドルスクール、キニック・ハイスクール、サリバズ・スクール）と日本語教育部研究員による協議集会を2度にわたって開き、各機関における教育実践の担当者としての実情報告及びそれぞれの日本語教育機関における問題提起があり、将来の年少者に対する日本語教育

のあり方と研究の方向等についての討議をおこなった。

2. 授業参観，担当者との面接等による教育機関の実態調査……日本語教育研究連絡協議会の開催と表裏の関係にあり，研究員が直接教育機関を訪問し実際の現場における内容と方法についての実態を調査するもので，本年度は年少者教育を中心に7機関を訪問した。

D 今後の予定

研究連絡協議会について年少者教育グループ以外に，帰国子女・引揚者教育グループ，あるいは留学生教育グループをも対象に加え，活動を継続し，実態調査についてもそれに並行して実施する予定である。

日本語教育教材および教授資料の作成

A 目 的

日本語教育にたずさわる人を対象として、その教授上必要とされる教育教材開発のためのモデル教材の作成、またその基礎的知識を確立し、指導上の参考に資するための教授資料の刊行を目的とする。

B 担 当 者

日本語教育部日本語教育研修室

部長 林 大 (51.1.16所長昇任, 以後3.31まで部長事務取扱)

室長 武田 祈 研究員 日向茂男 非常勤職員 山本妙子(50.12.31まで)

C 本年度の作業

1 日本語教育参考資料の作成

『日本語と日本語教育——文字・表現編』(国語シリーズ別冊4)を刊行した。
題名及び執筆者は次のとおりである。(所属は当時のものである。)

漢字・漢語 森岡健二(上智大学教授)

仮名とローマ字 玉村文郎(同志社大学助教授)

「ナル」表現と「スル」表現——日英「態」表現の比較——寺村秀夫(大阪外国語大学教授)

日西比較表現論 大倉美和子(大阪外国語大学講師)

日朝比較表現論 塚本勲(大阪外国語大学助教授)

待遇表現 宮地裕(大阪大学教授)

東西の比喩・象徴の表現 八木浩(大阪外国語大学教授)

日本の象徴主義 吉田弥寿夫(大阪外国語大学教授)

東西の言語生活 野元菊雄(国立国語研究所言語行動研究部長)

翻訳論 春名万紀子（大阪外国語大学助手）

作文指導 佐治圭三（大阪女子大学助教授）

外国人学生について——学生の心理—— 氏原寛（大阪外国語大学助教授）

なお、この“国語シリーズ別冊”は今回の“シリーズ別冊4”で一応完結した。

2 日本語教育映画の制作

今年度制作した日本語教育映画の題名および規格等は、次のとおりである。

イ 題名

「なにをしましたか」——動詞——

「しずかなこうえんで」——形容動詞——

「さあ、かぞえましょう」——助数詞——

「うつくしいさらになりました」——「なる」「する」——

ロ 規格等

規格 16ミリ，カラー，トーキー，1巻5分もの計4巻

企画 国立国語研究所

制作 日本シネセル株式会社

今年度制作した4巻は、昨年度制作した3巻とともに日本語教育映画基礎篇全50巻の一部をなすものである。この基礎篇50巻は、日本語教育入門期に学習される基礎的文法事項や文型を順次積み重ねることにより、学習者がひとつおりの基礎的日本語表現力を身につけることを目的としたもので、実際の教室で視聴覚補助教材として活用されることを考慮し、代表的な日本語教育入門期教科書の内容にできるだけ共通するよう配慮してある。

この映画の制作にあたっては、日本語教育映画等企画協議会を設け、池尾スミ（アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター専任講師）、石田敏子（国際基督教大学専任助手）、今田滋子（同大学専任講師）、川瀬生郎（東京外国語大学附属日本語学校助教授）、木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）、窪田富男（東京外国語大学助教授）、斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）、佐久間勝彦（アメリカ・カナダ11大学連合日本研究センター教材開発主任）の諸氏を委員に委

嘱して、主題、シナリオの決定、制作の指導等についての協力を得た。

D 今後の予定

日本語教授資料は、今までの「国語シリーズ別冊」とは別の企画のもとに新しいシリーズとして刊行していく予定である。新しいシリーズでは、実際の日本語教育の場で教授上問題となる具体的な事項に即した資料集のシリーズと指導上の参考となる教授参考書シリーズの二つを考えている。とりあえず、新しい形の教授参考書シリーズから着手していく。

モデル教材としての日本語教材開発に、日本語教育映画基礎篇の制作を更に押しすすめていく。今後は基礎篇のみならず、言語場面を主にした応用篇の制作も考慮する。

日本語教育研修の調査および実施

A 目 的

各種日本語教育機関その他において実施されている日本語教育のための講座・研修会等について、そのあり方および内容等について種々の資料・情報を得るとともに、現職者研修（日本語教育の経験2年以上の者を対象）、初心者研修（日本語教育の経験2年未満の者および日本語教員の希望者を対象）の2講座を夏期集中講座として東京会場・大阪会場それぞれにおいて開催する。

B 担 当 者

日本語教育部日本語教育研修室

室長 武田 祈 研究員 日向茂男——研修会のあり方および内容等についての資料および情報の収集・整理

日本語教育部日本語教育研修室、日本語教育研究室

部長 林 大 室長 武田 祈 水谷 修 研究員 日向茂男 高田 誠 非常勤職員 山本妙子——研修会の開催

C 本年度の作業

1 日本語教育研修の調査

日本語教育機関その他において実施されている夏期集中研修会を主として、その研修会の企画・運営・実施等の具体的実際的情報を収集整理するとともに、その研修内容や方法についての資料も収集検討し、当研究所主催の研修会実施にあたってその基礎的データとして役立てた。

2 日本語教育研修の実施

外国人のための日本語教育学会の協力のもとに当研究所の主催により、現

職者研修および初心者研修をそれぞれ東京会場・大阪会場で実施した。

会場・日時・内容等の実施内容は次のとおりである。

(1) 現職者研修

ア 東京会場

会場 オリピック記念青少年総合センター

日時 昭和50年7月22日(火)～7月26日(土)

内容 (講義題目・講師)

外国語教育論 小川芳男(日本国際教育協会理事)

対照言語学 高田誠(国立国語研究所日本語教育部研究員)

言語統計の話 中野洋(国立国語研究所言語計量研究部研究員)

文字論 斎賀秀夫(国立国語研究所言語計量研究部長)

語彙論 宮島達夫(国立国語研究所言語体系研究部第二研究室長)

構文論 南不二男(東京外国語大学教授)

文章論 林四郎(筑波大学教授)

日本語教育論Ⅰ——教材作成の問題 伊藤芳照(東京外国語大学附属日本語学
校助教授)

日本語教育論Ⅱ——教材利用の問題 木村宗男(早稲田大学語学教育研究所教
授)

日本語教育論Ⅲ——教師の問題 小出詞子(国際基督教大学準教授)

シンポジウム 奥津敬一郎(東京都立大学教授)

阪田雪子(東京外国語大学教授)

武部良明(早稲田大学語学教育研究所教授)

望月孝逸(千葉大学教授)

テスト論及び評価法 村石昭三(国立国語研究所言語教育研究部第一研究室長)

イ 大阪会場

会場 大阪府中小企業文化会館

日時 昭和50年8月5日(火)～8月9日(土)

内容(講義題目・講師)

対照意味論 毛利可信(大阪大学教授)

言語類型論 岸本通夫(大阪大学教授)

日本語とアジアの言語 崎山理（大阪外国語大学助教授）
助動詞の歴史 吉田金彦（大阪外国語大学教授）
機械による言語研究 石綿敏雄（国立国語研究所言語計量研究部第三研究室長）
表現と文法 宮地裕（大阪大学教授）
外国人留学生について 氏原寛（大阪外国語大学助教授）
語の種類 玉村文郎（同志社大学助教授）
社会言語学 野元菊雄（国立国語研究所言語行動研究部長）
方言学 徳川宗賢（大阪大学助教授）
語彙と表現 池上禎造（南山大学教授）
現代語の係り結び 佐治圭三（大阪女子大学助教授）
構文論 渡辺実（京都大学教授）
詩の言語 吉田弥寿夫（大阪外国語大学教授）
近代の言語理論と日本語教育 寺村秀夫（大阪外国語大学教授）
視聴覚教材 西出郁代（大阪外国語大学講師）

（２）初心者研修

ア 東京会場

会場 オリピック記念青少年総合センター

日時 昭和50年7月22日（火）～7月26日（土）

内容（講義題目・講師）

外国語教育論 小川芳男（日本国際教育協会理事長）

日本語教授法 浅野鶴子（東京日本語学校長）

日本語教育概観 斎藤修一（慶応義塾大学国際センター助教授）

文字と文字教育Ⅰ・Ⅱ 林大（国立国語研究所日本語教育部長）

音声と音声教育Ⅰ 大坪一夫（米加11大学連合日本研究センター語学課程主任）

今田滋子（国際基督教大学専任講師）

水谷修（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長）

杉原正勝（東京外国語大学附属日本語学校講師）

土岐哲（米加11大学連合日本研究センター専任講師）

ヤップモイフォン

音声と音声教育Ⅱ 大坪一夫（米加11大学連合日本研究センター語学課程主任）

今田滋子（国際基督教大学専任講師）

土岐哲（米加11大学連合日本研究センター専任講師）

水谷修（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長）

文法と文法教育Ⅰ 寺村秀夫（大阪外国語大学教授）

文法と文法教育Ⅱ 鈴木忍（東京外国語大学附属日本語学校教授）

視聴覚教材Ⅰ 石田敏子（国際基督教大学専任助手）

Ⅱ 川瀬生郎（東京外国語大学附属日本語学校助教授）

語彙と語彙教育 西尾寅弥（国立国語研究所言語体系研究部長）

待遇表現 池尾スミ（米加11大学連合日本研究センター専任講師）

イ 大阪会場

会場 大阪府中小企業文化会館

日時 昭和50年8月5日（火）～8月9日（土）

内容（講義題目・講師）

日本語教育の概観 吉田弥寿夫（大阪外国語大学教授）

日本語教授法 木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）

文法と文法教育Ⅰ 寺村秀夫（大阪外国語大学教授）

文法と文法教育Ⅱ 佐治圭三（大阪女子大学助教授）

視聴覚教材 乙政潤（大阪外国語大学助教授）

文字と文字教育Ⅰ 樺島忠夫（京都市立大学教授）

文字と文字教育Ⅱ 林大（国立国語研究所日本語教育部長）

語彙と語彙教育 玉村文郎（同志社大学助教授）

音声と音声教育Ⅰ 杉藤美代子（大阪樟蔭女子大学助教授）

音声と音声教育Ⅱ 大坪一夫（米加11大学連合日本研究センター語学課程主任）

山本進（大阪外国語大学助手）

水谷修（国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長）

高田誠（国立国語研究所日本語教育部研究員）

待遇表現 宮地裕（大阪大学教授）

なお、研修会の企画、運営・実施等については東京会場、大阪会場とも研修会運営委員会を設け、東京会場においては伊藤芳照（東京外国語大学附属日本語学校助教授）、木村宗男（早稲田大学語学教育研究所教授）、鈴木忍（東京外国

語大学附属日本語学校教授), 高橋一夫 (鶴見大学教授), 望月孝逸 (千葉大学教授) の諸氏を, 大阪会場においては佐治圭三 (大阪女子大学助教授), 玉村文郎 (同志社大学助教授), 寺村秀夫 (大阪外国語大学教授), 宮地裕 (大阪大学教授), 吉田弥寿夫 (大阪外国語大学教授) の諸氏を運営委員に委嘱してその協力を得た。

D 今後の予定

研修会の調査については, 夏期集中研修会についての情報・資料の収集整理にとどまらず日本語教員養成機関で実施されている講座の年間カリキュラムや教材の収集整理にもつとめる。また夏期集中研修会については, 実際に研修会に参加し, カリキュラム作成や講義演習等のすすめ方, また評価法の問題など具体的, 実践的な事項についての研究を深め, 当研究所で主催する研修会の内容充実のための礎とする。

研修会の実施については, 新庁舎完成後は従来の短期集中研修会だけではなく, 日本語教員研修の実情に即した多様な研修会を実施していく。

国語および国語問題に関する情報の収集・整理

国語に関する学問の研究成果一般を知り、あわせて関係学会の動向や言語および言語生活に関する世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和50年1月から12月までに刊行された図書・雑誌・新聞について、その期間内に発表された文献の調査を行った。これらの文献の目録は、その他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和51年版）に掲載した。また、諸新聞の関係記事は切り抜いて整理、整本し、研究資料として提供している。

以下、文献を内容によって分類したうえ、冊数または点数を示し、大まかな傾向を知る手がかりとする。（ ）内に前年の数を示し、今年の状況と比較できるようにした。

外国発行の刊行書・雑誌については、その採録範囲を日本語の研究および日本語教育に関するものに限定した。

以上の調査および国語年鑑の編集は、次のものが担当した。

言語変化研究部長 飯豊毅一 研究員 田原圭子 研究補助員 伊藤菊子 中曾根 仁

I 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・判型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化した。当研究所で入手できなかったものについては、『納本週報』（国立国会図書館）、その他の目録から情報を補い、総数858冊についての分類目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語(学)	40 (29)	音声・音韻	9 (5)
国語史	36 (49)	文字・表記	22 (27)

語彙・用語			
語彙・用語	29	(9)	
人名・地名	8	(1)	
文 法	14	(20)	
文章・文体	10	(5)	
方言・民俗	117	(93)	
ことばと機械	3	(4)	
コミュニケーション			
コミュニケーション一般(言			
語生活)	31	(13)	
言語技術(話し方・書き方)	36	(30)	
マス・コミュニケーション			
	8	(4)	
国語問題	8	(2)	
国語教育			
国語教育一般	39	(16)	
学習指導	27	(8)	
ことばの指導	0	(0)	
文字教育	2	(3)	
語彙・文法教育	2	(2)	
聞く・話す	0	(2)	
読む・読書指導	9	(7)	
書く・作文指導	5	(6)	
文学教育	6	(0)	
古典教育	1	(0)	
漢文教育	0	(0)	
特殊教育	1	(5)	
学力調査	0	(0)	
国語教科書その他	1	(4)	
幼児の言語発達	3	(6)	
外国人に対する日本語教育			
	6	(7)	
言語学その他	72	(59)	
辞典・用語集			
辞典・用語集一般	1	(0)	
国語辞典	9	(17)	
用語辞典・用語集	30	(20)	
特殊辞典	25	(23)	
索引	19	(25)	
資 料			
資料	27	(23)	
史料	16	(18)	
解題・目録	11	(19)	
年鑑	12	(14)	
			<u>計 695(575)冊</u>
追 補			
国語学その他	15	(9)	
国語史	3	(13)	
音声・音韻	7	(1)	
文字・表記	1	(4)	
語彙・文法	7	(8)	
文章・文体	0	(0)	
方言・民俗	21	(78)	
ことばと機械	0	(2)	
コミュニケーション	9	(12)	
マス・コミュニケーション			
	11	(4)	
国語問題	0	(0)	
国語教育	21	(18)	
外国人に対する日本語教育			

	10 (17)	辞典・索引・資料	35 (34)
言語学その他	23 (34)		<u>総計 858(809)冊</u>

II 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物や雑誌から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・巻号数・発行年月およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。当研究所で入手できなかったものについては『雑誌記事索引』（国立国会図書館）の人文・社会編，『LLBA』（Language and Language Behavior Abstracts），その他の目録類からできる限り情報を補った。採録した論文・記事の総数は，2,787点に達した。（連載物については，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた。）

1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数（目録から採録した分は含まない。）

a 一般刊行雑誌（学会誌等を含む）……403 (372) 種

国語・国文・言語ほか	150 (131)	週刊誌・総合誌	2 (1)
方言・民俗	12 (17)	文芸・詩歌・芸能	8 (4)
国語問題	6 (6)	その他（教育・社会学・心理学ほか）	80 (77)
国語教育	20 (23)	臨時に入った雑誌	32 (29)
日本語教育	6 (4)	外国誌	64 (56)
マス・コミ関係	12 (10)		
外国語	11 (14)		

b 大学・研究所等の紀要・報告類……264 (263) 種

2 論文・記事の分類とその点数

国語(学)		音声・音韻	
国語(学)一般	179 (181)	音声・音韻一般	60 (35)
時評・随筆	49 (50)	史的研究	18 (21)
国語史		アクセント・イントネーション	11 (11)
国語史一般	38 (31)	文字・表記	
訓点資料関係	7 (10)		

文字・字体	12 (33)
表記	31 (34)
語彙・用語	
語彙・用語一般	122 (97)
古語	53 (49)
現代語	15 (19)
新語・流行語	2 (4)
外来語	3 (7)
人名・地名	20 (14)
辞書・索引	44 (22)
文 法	
文法上の諸問題 (現代語法)	72 (67)
史的研究	21 (39)
敬語法	25 (15)
文章・文体	
文章・表現一般	22 (17)
史的研究	51 (64)
古典の注釈	
注釈一般	0 (33)
上代	35 (17)
中古	9 (15)
中世	9 (6)
近世以降	3 (3)
方言・民俗	
方言一般	24 (39)
各地の方言	
東部	38 (35)
西部	18 (66)
九州・沖縄	25 (18)
民俗	12 (22)

ことばと機械

言語情報処理	23 (10)
研究用機器	3 (4)

コミュニケーション

コミュニケーション一般	39 (63)
言語生活	60 (30)
言語活動	
言語活動一般	36 (21)
書く・読む	37 (27)
話す・聞く	9 (6)

マス・コミュニケーション

一般的問題	8 (6)
新聞	6 (1)
放送	31 (34)
広告・宣伝	4 (1)
印刷・出版	0 (0)

国語問題

国語問題一般	53 (33)
表記法	37 (18)

国語教育

国語教育一般	132 (100)
国語教育史	12 (4)
学習指導	157 (86)
ことばの指導	1 (5)
文字・表記教育	14 (7)
語彙教育	3 (18)
文法教育	17 (2)
聞く・話す	1 (4)
読む・書く	
読む・書く一般	34 (23)
読解指導	39 (30)
読書指導	9 (46)

作文指導	47 (49)
文学教育	21 (4)
古典教育	6 (6)
漢文教育	5 (9)
特殊教育	21 (19)
学力評価	5 (3)
国語教科書・教材研究	23 (11)
幼児の言語発達	28 (24)

外国人に対する日本語教育

64 (73)

言語(学)

言語一般	106 (104)
意味	6 (9)
比較研究	23 (24)
翻訳の問題	24 (22)
外国語研究	22 (22)
外国語教育(学習)	60 (34)
各国の言語問題(教育)	28 (5)
言語障害研究	43 (30)

資料

資料一般	12 (21)
国語資料	16 (14)
翻刻	12 (28)
目録	8 (7)

書評・紹介

国語学その他	33 (23)
音声・音韻	3 (11)
文字・表記	0 (0)
語彙・用語	12 (5)
文法	13 (13)
文章・文体	4 (2)

方言・民俗	5 (3)
ことばと機械	0 (0)
コミュニケーション	7 (11)
マス・コミュニケーション	
	4 (0)
国語問題	0 (1)
国語教育	21 (15)
外国人に対する日本語教育	

2 (2)

言語学その他	40 (26)
--------	---------

計 2,517 (2,291) 点

追 補

国語学その他	27 (9)
国語史	19 (3)
音声・音韻	28 (22)
文字・表記	8 (5)
語彙・用語	36 (20)
文法	26 (30)
文章・文体	14 (13)
古典の注釈	5 (5)
方言・民俗	12 (15)
ことばと機械	0 (1)
コミュニケーション	6 (6)
マス・コミュニケーション	
	0 (1)
国語問題	1 (3)
国語教育	19 (43)
外国人に対する日本語教育	
	2 (3)
言語学その他	55 (59)
資料	6 (9)
書評・紹介	6 (5)

総計 2,787(2,543)点

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き点数は3,048点で、その内訳は次のとおりである。

1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		週刊・その他	
朝日	453 (301)	日本読書新聞	32 (20)
(大阪)*	1 (2)	週刊読書人	75 (43)
毎日	346 (248)	図書新聞	27 (31)
読売	584 (222)	新聞協会報	51 (38)
東京	497 (388)	教育学術新聞	14 (7)
サンケイ	395 (198)	その他	84 (27)
日本経済	159 (146)	計	3,048 (1,944)点
北海道	175 (141)		
西日本	155 (132)		

* (大阪) は、大阪版で、関係者のご好意により送られたものである。

2 月別の切り抜き点数

1月	185 (135)	2月	257 (159)	3月	272 (176)
4月	248 (171)	5月	224 (177)	6月	264 (190)
7月	278 (145)	8月	258 (111)	9月	207 (148)
10月	328 (171)	11月	299 (183)	12月	228 (178)

3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	397 (171)	語彙一般	107 (135)
音声・音韻	31 (23)	各種用語	90 (33)
文字		新語・流行語・隠語	147 (55)
文字・表記	98 (18)	外国語・外来語	35 (144)
活字	8 (7)	辞書	29 (40)
語彙		問題語・命名	95 (45)
		人名・地名	63 (35)
		文法	0 (3)

文 体

文体・表現 29 (23)

方 言

方言一般 49 (30)

方言と標準語 7 (5)

各地の方言 17 (16)

言 語 生 活

言語生活一般 79 (67)

ことばの問題 84 (46)

ことばづかいの問題 17 (17)

敬語の問題 43 (15)

言 語 活 動

言語活動一般 23 (8)

話すこと(聞くこと) 67 (30)

書くこと(読むこと) 22 (14)

読書 43 (32)

ことばと機械

16 (16)

国 語 問 題

国語問題一般 54 (13)

表記の問題

表記一般 35 (22)

当用漢字など 108 (61)

かなづかい 2 (2)

送りがな 5 (2)

かな書き 3 (4)

横書き・縦書き 2 (1)

人名・地名の表記 18 (14)

外来語表記 15 (6)

ローマ字 9 (5)

国 語 教 育

国語教育一般 80 (35)

学習指導の問題

学習指導一般 29 (18)

話す(聞く) 2 (2)

読む(読書指導) 17 (16)

書く(作文指導) 11 (6)

文学・古典教育 7 (1)

特殊教育 27 (21)

視聴覚教育 3 (1)

学力テスト 21 (2)

幼児語教育 38 (20)

ローマ字教育 3 (0)

言 語 学

言語学一般 50 (43)

外国語一般 94 (51)

比較研究 90 (18)

翻訳の問題 39 (49)

外国語教育 79 (50)

外国語に関する紹介ほか 41 (23)

日本語の研究と教育 80 (102)

マス・コミュニケーション

マス・コミ一般 70 (19)

新聞 50 (9)

放送 44 (43)

広告・宣伝 60 (50)

出版 62 (50)

書評・紹介ほか 205 (157)

計 3,048 (1,944) 点

切り抜き点数は、昨年より一千点あまりも多かった(くわしくは『国語年鑑』<51年版>に掲載)。日本語論のブームを反映してか、『東京新聞』(「当

今政治用語辞典」,「古語雑談」,「日本語と朝鮮語」ほか)をはじめ、『読売新聞』(「日本語の現場」),『朝日新聞』,『サンケイ』,『北海道新聞』の各紙に連載のコラム欄があったことによる。

分類項目別で、「国語(学)一般」,「文字・表記」,「新語・流行語・隠語」,「国語問題一般」,「当用漢字など」,「比較研究」,「マス・コミ一般」,「新聞」などの点数が昨年に比して多いのも上記の反映である。また、今年は、差別語の問題が社会的な話題となり、各紙に関連記事が多く、主として、「ことばの問題」の項目に分類されたため、例年に比してこの項の点数も多かった。なお、「外国語・外来語」の項目がきわだって少なくなっているのは、昨年は、この項に関する連載のコラム欄があったが今年は上記のように主題が変わったことによる。

〔付 所外からの質問について〕

昭和50年度に電話で受けた質問件数を示すと次のとおりである。

計	月	50年	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	51年	1月	2月	3月
	4月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
	1116	88	67	91	118	103	99	98	82	81	92	90	107	

(前年度の質問件数は792件であった)

質問の件数は昨年より三百件あまりも多かった。内容は、例年どおり多方面にわたっていたが、件数の多かったものを示すと次のとおりである。

用字用語について287件(同音類義語86件,用字一般80件,用語一般77件)あり、例年どおり多かった。同音類義語の使い分けでは、異状・異常6件,換える・替える・代える6件,同志・同士3件,型・形3件などが件数の多いものだった。漢字の読み176件,このなかでは姓名に関してが68件と例どおり多かった。また、梶・櫛・飯・鵲・鉞などの当用漢字外の漢字の読みについて31件あった。そのほか、字体47件,送りがな44件,かなづかい42件,敬語37件,方言35件,などが件数の多いものだった。なお、研究所および研究所の刊行物についての照会が99件あった。電話の質問のほかには、はが

き，封書による質問が20通あった。

以上の件数は，すべて質問の係をとったもので，所員が個人的に受けた質問は含んでいない。

図書の収集と整理

前年度にひきつづき、研究所の調査研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

昭和50年度に受け入れた図書および逐次刊行物の数は、次のとおりである。

図書

受入……1,659冊

	購 入	寄 贈	製本雑誌	その他	計
和 書	927	238	149	27	1,341
洋 書	286	18	0	0	304
計	1,213	256	159	27	1,645

逐次刊行物（学術雑誌，紀要，年報類）

継続受入……640種

	購 入	寄 贈	計
和	51*	525	576
洋	43	21	64
計	94	546	640

*新聞(5種)を含む

庶務報告

I 庁舎および経費

1 庁舎

所在 東京都北区西が丘3丁目9番14号

敷地 10,030m²

建物 3,626m²

図書館 鉄筋コンクリート平屋建書庫積層 (延) 213m²

(旧) 電子計算機室 鉄筋コンクリート平屋建 106m²

その他附属建物 (延) 292m²

研究棟 鉄筋コンクリート3階建 (延) 3,015m²

研究室 872m²

電子計算機室 339m²

実験室 384m²

機械室 96m²

その他 1,324m²

※ 本館(延1,576m²)は管理棟および日本語教育センター(昭和51年9月末竣工予定)新設のため撤去

2 経費

昭和50年度予算額

人件費 286,388,000円

事業費 140,144,000円

各所修繕費 273,000円

II 評議員会(昭和51年3月31日現在)

会長 有光次郎

副会長 佐伯梅友

石井庄司

石井良助

岩村 忍	江尻 進
遠藤嘉基	小川芳男
小野吉郎	何 初彦
坂井利之	沢田慶輔
田中千禾夫	千葉雄次郎
徳永康元	中村光夫
西尾 実 (昭和51年 2月18日辞任)	久松潜一 (昭和51年 3月 2日死亡)
福島慎太郎	頼 惟勤

Ⅲ 組織と職員

1 定員 77名

2 組織および職員 (昭和51年 3月31日現在)

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	岩淵悦太郎	51. 1. 16 退職
	所 長	林 大	{ 51. 1. 16 就任
庶務部	部 長	荻原 湜	{ 51. 1. 16~51. 3. 31 日本語教育部長 事務取扱
庶務課	課 長	中満 知生	
	課長補佐	国井 和朗	
	庶務係長	菊地 貞	
		岡本 まち	
		荒川佐代子	
	併 任	田島 正幸	
会計課	課 長	渡部 新一	
	課長補佐	山本 昌志	50. 4. 1 国立西洋美術館に転出
	課長補佐	広瀬 二郎	50. 4. 1 奈良国立文化財研究所から転入
		金田 とよ	
	経理係長	山本 光夫	
		岩田 茂男	

	用度係長	中村 佐仲	
		加藤 雅子	
		木村 権治	
		鈴木 亨	
		安藤信太郎	
		浅香 忠雄	
	非常勤	小原ちい子	(50.4.1~51.3.30まで)
		中山 典子	(50.4.1~51.3.30まで)
図書館		大塚 通子	
		塚田 吉彦	
言語体系研究部	部長	西尾 寅弥	50.10.6~50.12.5 文部省在外研究員 (独・英・仏・伊)
第一研究室	室長	高橋 太郎	
		工藤 浩	
		鈴木美都代	
第二研究室	室長	宮島 達夫	
		村木新次郎	49.9.1~51.8.31 外国出張 (西ドイツ)
		高木 翠	
言語行動研究部	部長	野元 菊雄	{ 49.4.11~51.1.31 言語行動研究部第三 研究室長事務取扱 50,10.6~50.12.5 言語体系研究部長 事務代理
第一研究室	室長	中村 明	50.4.1 昇任
	主任研究官	江川 清	
		杉戸 清樹	50.4.1 採用
		林 実知代	
		堀江よし子	50.4.25 言語変化研究部第二研究室より 配置換
第二研究室	室長	渡辺 友左	
		山口 恵子	{ 50.4.1 採用 51.3.31退職
第三研究室	室長	神部 尚武	51.2.1 昇任
	主任研究官	上村 幸雄	49.4.1~51.3.31 外国出張 (西ドイツ)
		高田 正治	

	非常勤	齋田 真也	(51.2.3~51.3.30)
言語変化研究部	部長	飯豊 毅一	
第一研究室	室長	徳川 宗賢	50.4.1 大阪大学に転出
	"	佐藤 亮一	50.4.1 昇任
		真田 信治	50.4.1 採用
		白沢 宏枝	
第二研究室	室長	飛田 良文	
		梶原滉太郎	
		中山 典子	
		田原 圭子	
		伊藤 菊子	
		中曽根 仁	
言語教育研究部	部長	芦沢 節	
第一研究室	室長	村石 昭三	
	主任研究官	大久保 愛	
		岩田 純一	
		川又瑠璃子	
言語計量研究部	部長	齋賀 秀夫	{ 49.4.11~50.4.1 言語計量研究部 第一研究室長事務取扱 50.4.1~50.7.1 言語計量研究部第二研究室長事務取扱
第一研究室	室長	土屋 信一	50.4.1 言語計量研究部 第二研究室長から配置換
		中野 洋	
		鶴岡 昭夫	
		岡田 敏子	50.9.30 退職
		長田 厚子	50.11.1 採用
		堀江久美子	50.4.25 言語計量研究部 第三研究室から配置換
第二研究室	室長	田中 章夫	50.7.1 昇任 言語計量研究部 第一研究室から配置換
		野村 雅昭	50.4.1 筑波大学に転出 (50.6.1~50.7.31 非常勤)
		佐竹 秀雄	50.4.1 採用
		田島 道子	51.3.31 退職

第三研究室	室長	石綿 敏雄	
	主任研究官	齋藤 秀紀	
		米田 正人	
		竹内 純子	
		科野 千夏	(旧姓白木) 50.4.25 言語計量研究部 第二研究室から配置換
		小高 京子	
		沢村都喜江	
日本語教育部	部長	林 大	(50.4.1~51.1.16まで)
日本語教育研究室	室長	水谷 修	
		高田 誠	
		志部 昭平	50.10.1 採用
日本語教育研修室	室長	武田 祈	
		日向 茂男	50.4.1 採用
		田島 正幸	
	非常勤	山本 妙子	(50.4.1~50.12.31まで)

Ⅳ 研究発表会

研究発表会 用語用字調査と機械処理 (来会者約100名)

日時 昭和51年3月24日(水) 午後1時30分~4時30分

場所 岩波ホール集会室

あいさつ 所長 林 大

助詞助動詞接続の計量的分析

一言語処理における多変量解析の応用一

言語計量研究部第三研究室研究員 米田 正人

漢字プリンタによる

ターン・アラウンド・システム // 齋藤 秀紀

言語処理における一貫処理システム 第一研究室研究員 中野 洋

質疑応答 司会 第三研究室長 石綿 敏雄

高校教科書用語調査における言語単位

	第一研究室研究員	齋岡 昭夫
表記のゆれを測る	第二研究室研究員	佐竹 秀雄
新聞語彙調査のカタカナ表記語	第一研究室長	土屋 信一
漢字の計量的調査における問題点	第二研究室長	田中 章夫
質疑応答	司会	言語計量研究部長 齋賀 秀夫

V 外国人研究員および内地留学生の受入れ

I 外国人研究員

氏名・職名	研究題目	研究期間
イルジー・ネウストウブニ モナシュ大学日本語部主任 教授（オーストラリア）	英語国民に対する日本語教育 の方法に関する研究	昭和50年11月6日から 昭和51年3月1日まで
ロバート・スークル コーネル大学言語学研究生 （アメリカ）	日本における syntactic For- ms の種類の発生を支配する 社会言語学的特徴および英語 との対照についての資料収集 と分析	昭和49年9月1日から 昭和50年8月31日まで
ヴィエスワフ・コタンスキ ワルシャワ大学教授 （ポーランド）	日本語からの翻訳の言語学的 諸問題	昭和50年10月1日から 昭和50年12月31日まで
福島 尚彦 スインバン工科大学日本語 講師 （オーストラリア）	アジア諸国言語文化教育振興 のための、日本語副教材の作 成に関する研究並びに資料収 集	昭和50年1月1日から 昭和50年12月31日まで

II 内地留学生

氏名	勤務・職名	研究題目	研究期間
石崎 公曹	名瀬市金久中学校教諭	奄美大島北部方言辞典 作成および日本語の文 法音韻形態論の研究	昭和50年4月1日から 昭和51年3月31日まで

Ⅵ 日記抄

1975. 6. 5 文化庁附属機関庶務会計部課長会議（国立教育会館）
// 文化庁文化部長および国語課長来訪
- 11 }
12 } 第34回 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（学士会館）
- // 文部省所轄研究所長会議（東京酒樓）
- 13 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所事務長会議総会（学士会館）
- 14 合同講演会 統計数理研・国語研・東文研（発明会館ホール）
- 25 第87回 国立国語研究所評議員会（如水会館）
- 30 学習院短期大学 松本泰丈氏他 5名来訪
- 7.22 日本語教育初心者および現職者研修（22～26）開催（オリンピック記念青少年総合センター）
8. 5 日本語教育初心者および現職者研修（5～9）開催（大阪府立中小企業会館）
9. 8 ニューゼーランド教育庁 視学官 Donald, c. welch 氏来訪
- 13 大蔵省主計局干場氏，文化庁長官官房会計課坂口予算係長，国語課森係長来訪
10. 6 パリ大学教授ビビヤヌ・アルトン，エレヌ・ベストウジェフ，ジャンピエール・デクレ氏，通訳アオン氏来訪
- 7 マンハイム，ドイツ語研究所長スティッケル氏及びエンゲル氏来訪
- 15 文化庁長官官房中西会計課長，星村・吉野両課長補佐来訪
- 17 文化庁附属機関長会議（国立教育会館）
- // 文化庁長官および国語課長来訪
- 20 チェコスロバキア プラハ大学大学院生 Fiála 氏来訪
- 21 文化庁長官官房庶務課長工事現場視察のため来訪
- 22 第26回 文部省所轄機関事務協議会（22～24）（国立岩手山青年の家）
- // コーネル大学 ポールチェン氏来訪
- 10.22 文部省所轄ならびに国立大学院附置研究所長会議第3部会（22～24）（ロイヤルNCB会議室）

11. 5 文部省所轄研究所長会議（5～6）（奈文研）
6 名古屋市立大高中学校 長谷川雄次郎氏視察
// 筑波大学学生9名視察
17 文部省管理局教育施設部 霜田専門職員来訪
18 バングラデシュ ダッカ大学教授 Mohammad Mohiyud-Din 氏来訪
28 ストックホルム大学助手 Jonas Eric Engberg 氏来訪
12. 12 文部省所管研究所第3部会事務協議会（12—13）（特殊研）
16 フィリピン国立国語研究所副所長ヤップ氏来訪
18 第88回 国立国語研究所評議員会開催（如水会館）
20 創立記念日
1976. 1. 12 文化庁次長来訪
29 人事事務部内監査
2. 19 ハーバード大学生メリーホワイト氏来訪
// 日本女子大学教授井出祥子氏来訪
23 行政管理庁 向坂管理官，菊地副管理官，浅野主査来訪
25 ニューゼーランド オークランド教育庁視学官ケリー氏来訪
3. 8 文化庁附属機関長会議（文部省）
// 文化庁研究職員格付審査会（文部省）
9 モスクワ大学助教授ヴィコワ女史他2名来訪
13 各地方言資料の収集および文字化のための研究打合せ会（国立国語研究所会議室）
15 第89回 国立国語研究所評議員会（如水会館）
18 文部省所轄研究所事務協議会（如水会館）
// 岩手県立教育センター研究員渡辺市勇氏来訪
24 ニューゼーランド クライストチャーチ師範大学プライス氏来訪
26 職員レクリエーション 文楽鑑賞（国立小劇場）

昭和51年9月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘 3-9-14
電話東京 (900) 3111(代表)

UDC 058 : 809.56

NDC 810.5

本書の市販品発行所

〒162 東京都新宿区納戸町40 (260) 5281

株式会社 秀英出版

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

1	八丈島の言語調査	秀英出版社	品切れ
2	言語生活の実態 ——白河市および付近の農村における——	〃	〃
3	現代語の助詞・助動詞 ——用法と実例——	〃	700円
4	婦人雑誌の用語 ——現代語の語彙調査——	〃	500円
5	地域社会の言語生活 ——鶴岡における実態調査——	〃	品切れ
6	少年と新聞 ——小学生・中学生の新聞への接近と理解——	〃	180円
7	入門期の言語能力	〃	品切れ
8	談話語の実態	〃	〃
9	読みの実験的研究 ——音読にあらわれた読みあやまりの分析——	〃	〃
10	低学年の読み書き能力	〃	〃
11	敬語と敬語意識	〃	〃
12	総合雑誌の用語(前編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
13	総合雑誌の用語(後編) ——現代語の語彙調査——	〃	〃
14	中学生の読み書き能力	〃	400円
15	明治初期の新聞の用語	〃	品切れ
16	日本方言の記述的研究	明治書院刊	〃
17	高学年の読み書き能力	秀英出版社	〃
18	話しことばの文型(1) ——対話資料による研究——	〃	800円
19	総合雑誌の用字	〃	品切れ
20	同音語の研究	〃	〃
21	現代雑誌九十種の用語用字(1) ——総記および語彙表——	〃	〃
22	現代雑誌九十種の用語用字(2) ——漢字表——	〃	1,000円

23	話しことばの文型 (2) —独話資料による研究—	秀英出版刊	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	〃	〃
25	現代雑誌九十種の用語用字 (3) —分析—	〃	〃
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	2,100円
27	共通語化の過程 —北海道における親子三代のことは—	秀英出版刊	品切れ
28	類義語の研究	〃	〃
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	400円
30-1	日本語地図 (1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
30-2	日本語地図 (2)	〃	〃
30-3	日本語地図 (3)	〃	〃
30-4	日本語地図 (4)	〃	8,000円
30-5	日本語地図 (5)	〃	9,000円
30-6	日本語地図 (6)	〃	10,000円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	450円
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	〃	品切れ
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	350円
34	電子計算機による国語研究(Ⅱ) —新聞の用語用字調査の処理組織—	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—	〃	450円
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	5,000円
37	電子計算機による新聞の語彙調査	〃	1,300円
38	電子計算機による新聞の調彙調査(Ⅱ)	〃	2,800円
39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	〃	700円
40	送りがな意識の調査	〃	1,500円
41	待遇表現の実態 —松江24時間調査資料から—	〃	900円
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ)	〃	1,200円
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	5,000円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	3,000円

45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,500円
46	電子計算機による国語研究(IV)	秀英出版刊	700円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) ——性向語彙と価値観——	〃	700円
48	電子計算機による新聞の語彙調査(IV)	〃	3,000円
49	電子計算機による国語研究(V)	〃	900円
50	幼児の文構造の発達 ——3歳～6歳児の場合——	〃	品切れ
51	電子計算機による国語研究(VI)	〃	1,000円
52	地域社会の言語生活 ——鶴岡における20年前との比較——	〃	1,800円
53	言語使用の変遷(1) ——福島県北部地域の面接調査——	〃	2,500円
54	電子計算機による国語研究(VII)	〃	1,000円
55	幼児語の形態論的な分析 ——動詞・形容詞・述語名詞——	〃	1,300円
56	現代新聞の漢字	〃	3,000円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17～24年)	秀英出版刊	45円
2	語彙調査 ——現代新聞用語の一例——	〃	品切れ
3	送り仮名法資料集	〃	〃
4	明治以降国語学関係刊行書目	秀英出版刊	〃
5	沖繩語辞典	大蔵省印刷局刊	3,500円
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,600円
7	動詞・形容詞問題語用例集	〃	1,700円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	〃	500円
9	牛店 <small>牛店</small> 安愚楽鍋用語索引	〃	1,500円

国立国語研究所論集

1	ことばの研究	秀英出版刊	品切れ
2	ことばの研究第2集	〃	750円
3	ことばの研究第3集	〃	品切れ
4	ことばの研究第4集	〃	1,300円
5	ことばの研究第5集	〃	1,300円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭和24年度	品切れ	15	昭和38年度	250円
2	昭和25年度	〃	16	昭和39年度	品切れ
3	昭和26年度	160円	17	昭和40年度	250円
4	昭和27年度	160円	18	昭和41年度	300円
5	昭和28年度	品切れ	19	昭和42年度	300円
6	昭和29年度	200円	20	昭和43年度	品切れ
7	昭和30年度	品切れ	21	昭和44年度	〃
8	昭和31年度	〃	22	昭和45年度	400円
9	昭和32年度	〃	23	昭和46年度	450円
10	昭和33年度	〃	24	昭和47年度	450円
11	昭和34年度	〃	25	昭和48年度	品切れ
12	昭和35年度	350円	26	昭和49年度	600円
13	昭和36年度	160円	27	昭和50年度	
14	昭和37年度	220円			

国語年鑑 秀英出版刊

昭和29年版	品切れ	昭和41年版	1,100円
昭和30年版	〃	昭和42年版	1,100円
昭和31年版	〃	昭和43年版	品切れ
昭和32年版	〃	昭和44年版	1,500円
昭和33年版	〃	昭和45年版	1,500円
昭和34年版	〃	昭和46年版	2,000円
昭和35年版	〃	昭和47年版	2,200円
昭和36年版	800円	昭和48年版	2,700円
昭和37年版	品切れ	昭和49年版	3,800円
昭和38年版	〃	昭和50年版	3,800円
昭和39年版	980円	昭和51年版	4,000円
昭和40年版	1,100円		

日本語教育教材

1	日本語と日本語教育 —国語シリーズ別冊3—	国立国語研究所 文化庁 共編	大蔵省印刷局刊 650円
2	日本語と日本語教育 —国語シリーズ別冊4—		大蔵省印刷局刊 850円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊 280円
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊 品切れ

1975—1976
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1975 to March 1976

The Descriptive Study of Modern Japanese Grammar

A General Survey of Modern Japanese Vocabulary

A Sociolinguistic Study on Japanese Honorifics

Comparative Study on the Variations of Language Behavior Between
Various Social Groups

A Stylistic Study of Modern Japanese

Linguistic Sociological Study on the Kinship Vocabulary of Japanese
Dialects

Study on the Physiological Process of Pronunciation

Information Processing in Visual Pattern Perception and Reading

On Checking the Linguistic Atlas of Japan

On the Taping and Transcription of Japanese Dialects

Basic Study on the Relation Between Language and Social Structure

Research on the Borrowing of Chinese Words in the Early Meiji
Period

Study on the Relation Between Acquisition of Word Meaning and
Cognitive Development in Children

Research on the Language Ability of Elementary and Middle School
Students

The Analytic Study of Language Data by Computer

The Lexical Study on Works by Sôseki and Ôgai

Study on the Writing System of Modern Japanese

Statistical Investigation of High School Textbook Vocabulary

A Study of Fundamental Vocabulary for Japanese Language Teaching

Research on Existing Studies Related to Japanese Language Teaching

A Study of the Current State of Japanese Language Teaching

—Contents and Methodology—

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO

「国立国語研究所年報27」正誤表

ページ・行	誤	正
2. - 4	日本語教育研究室	日本語教育研修室
6. 10	日本語教育研究部	日本語教育部
22. 9	眠球運動	眼球運動
76. - 8	159	149